

3. 調査の概要

調査地はかつての水田に約1mの盛り土がされており、それより下50cm程度で遺構面に達する。出土した遺構・遺物は弥生時代前期・後期と平安時代前・後期に属するものである。調査区の北端では遺構・遺物ともほとんど確認されず、調査対象地以北には遺跡が拡がらないという試掘調査の結果と合致する。

S D 01

調査区の南半で検出した断面V字形の溝状遺構で、調査地区内では弧を描く。その幅は2m前後で、最大幅は2.5m、深さ80~90cmである。溝内からは弥生時代前期と後期の土器が出土しているが、層位的に分別できず混在する。したがって、構築時期は明らかでないが、埋没は後期と考えられる。なお、調査区南端近くの溝内で弥生時代後期の完存する壺形土器が出土している。

S D 02

この遺構もS D 01と同様の溝状遺構で、調査区の中央部で検出している。部分的には蛇行しているようにも見えるが、全体としては直線的である。その幅は2m前後で、最大幅2.8m、深さ70~90cmである。溝内からは弥生時代前期・後期の土器、平安時代（9~11世紀）中頃の須恵器、土師器が出土している。遺物は上層で集中して検出され、殊に平安時代に属するものはまとまっている。したがって、S D 01と同様構築時期は明らかでないが埋没は平安時代と考えられる。なお、S D 02はS D 01より後に構築されたことは、その切り合い関係によって確認できる。

S D 03

調査区の南東隅で西側の肩がわずかに検出されたのみである。遺構内の堆積土層から溝状遺構の可能性が考えられる。調査区外に拡がるため、規模等は不明である。

S D 04

幅40cm前後で深さは10cmと浅い溝状の遺構である。堆積土は砂で、遺物はほとんど含まれず、時期は不明であるが、S D 02より後出るものである。

S D 05

調査区の東壁に沿うように検出された幅30cm、深さ3~5cmの小規模な溝状遺構である。中世の水田に伴う鋤き溝の可能性が考えられる。

S D 06

S D 02に先行する小規模な溝状遺構で、幅1.2m前後、深さ15cmである。

S D 07

S D 04に平行に走る東西方向の溝状遺構である。幅0.8~1.0m、深さ60cmで、堆積土中から少量の弥生時代前期の土器が出土しているが切り合い関係からS D 01・02より後出するすることが確認できる。



fig. 90
調査区全景

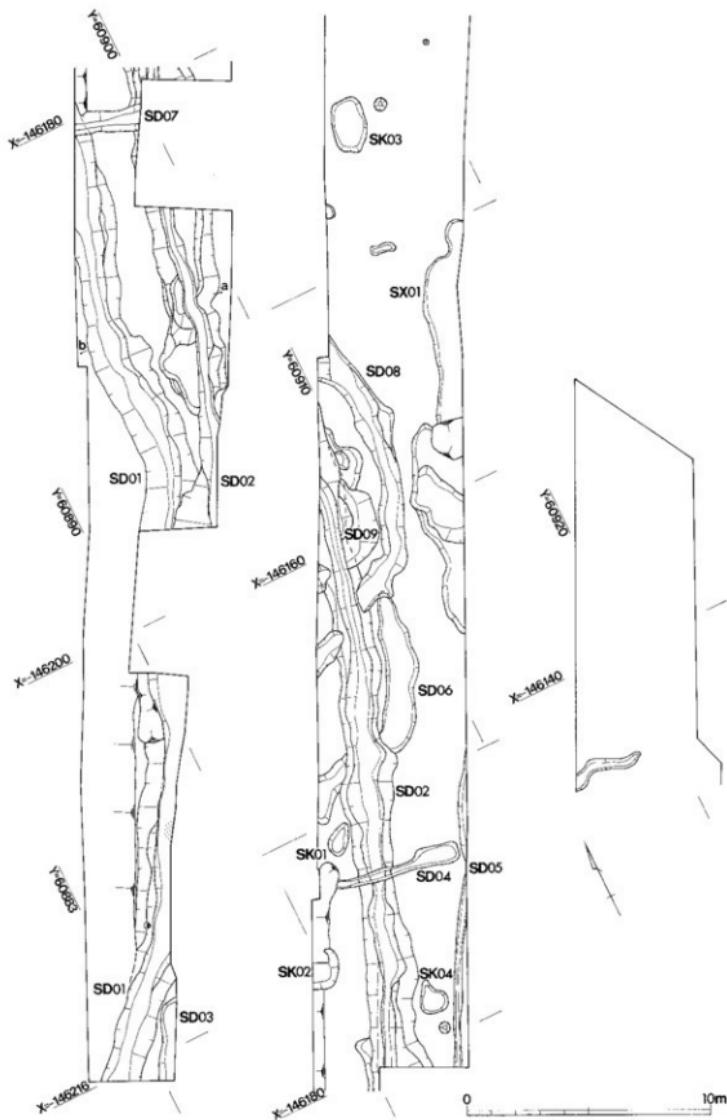


fig. 91 造構配置図

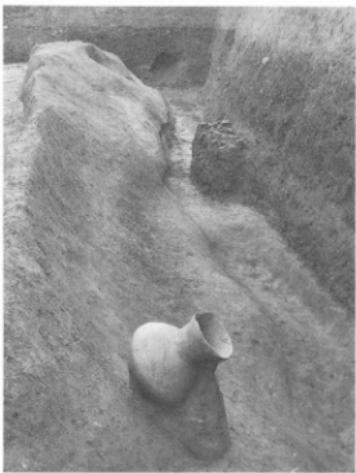
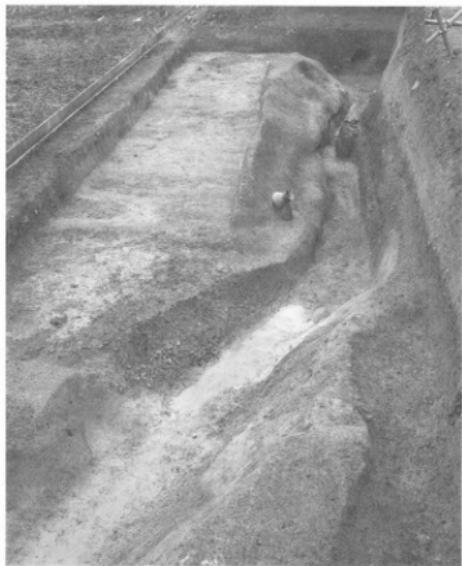


fig. 93 SD 01弥生土器出土状況（南から）

fig. 92 SD 01全景（南から）

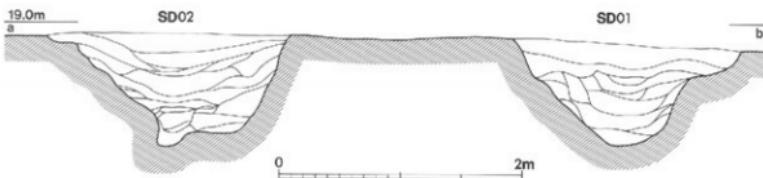


fig. 94 SD 01・02断面図



fig. 95 SD 01・02断面
(北から)



fig. 96 S D 02全景（北から）

- S D 08 円弧を描く溝状遺構で、幅1.0～1.5m、深さ35cm前後である。堆積土からは弥生時代後期と考えられる土器が出土している。
- S D 09 S D 02・08を検出した面より、10～30cm下層で検出した溝状遺構である。平面形は円弧を描いており、幅1.5m、深さ30cmである。弥生時代後期の遺物が若干出土している。
- S X 01 不整形の落ち込みで、遺構というよりも、自然堆積による土層変化と考えた方がよいであろう。
- S K 01 楕円形の土坑で、長径1.3m×短径0.7m、深さ10cmの浅い土坑で弥生時代前期の土器とともに、石器原材料となる大型のサメカイト片が出土している。
- S K 02 掘乱によって全体形状は不明であるが、径1.5m以上、深さ35cmの土坑で、弥生時代前期の土器が出土している。
- S K 03 隅円方形の土坑で、一辺2.2m×1.4m、深さ15cmである。遺物の出土はない。
- S K 04 長径1.4m×短径1.1mであるが不整形で、深さ12cmである。弥生時代前期の土器が出土している。

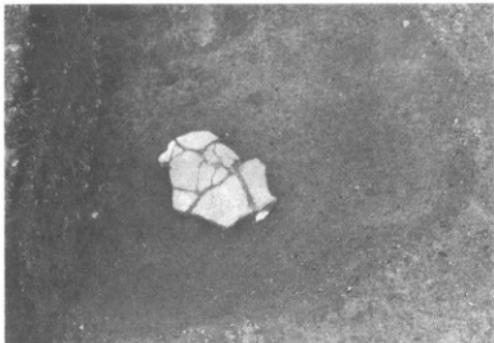


fig. 97 S K 02土器出土状況

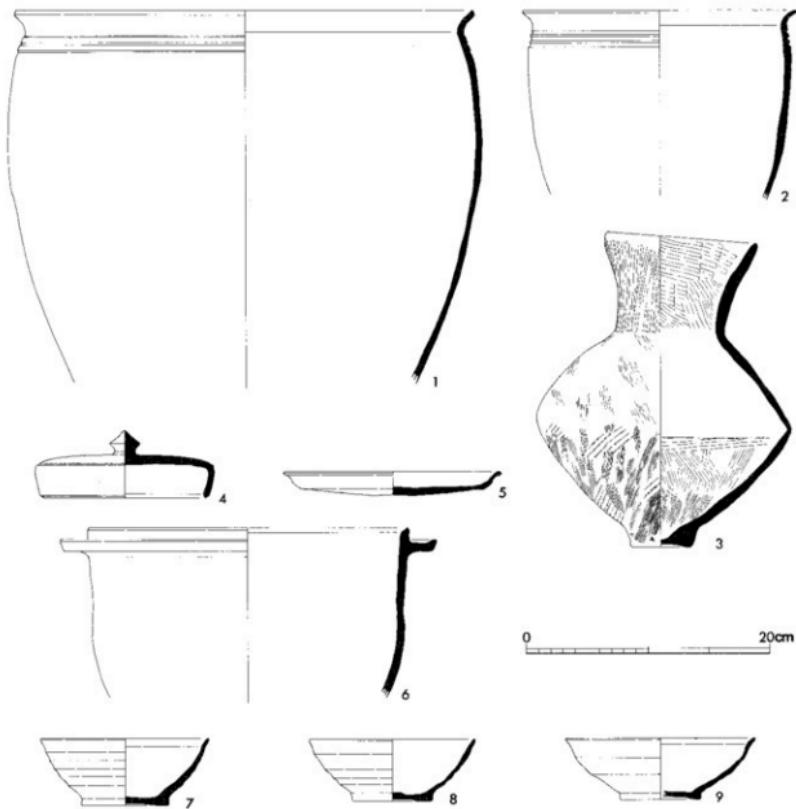


fig. 98 出土遺物実測図 1 SK02 2 SK01 3 SD01 4~9 SD02

4.まとめ

今回の調査では、調査区が狭小であったにもかかわらず、SD01・02をはじめ多数の遺構を検出することができた。

殊に、櫛谷川流域においてはじめて弥生時代前期の遺構・遺物が出土したことは、明石川流域における弥生集落の展開を考えいく上で、重要な意味を持っている。

また、溝状遺構として取り扱ってきたSD01・02は時期は異なるものの、その形態、埋没状況から人工の溝であると考えられる。SD01は弥生時代の集落ないしは水田と密接に関連すると考えられ、SD02は付近に近年まで残存していた方形地割と同方位を示すことから、条里と関連する遺構と考えられる。今後付近の調査が進展すれば明らかになるであろう。

9. 水谷遺跡

1. 位置と環境

権谷地区は南西に延びる低い丘陵を明石川の支流である権谷川が開削して形成された地域である。水谷遺跡は権谷川下流域左岸に位置し、標高約32mの段丘上の突端に立地している。段丘上と沖積地の比高差は約12mである。

当遺跡の周辺には、南北に延びる段丘上で弥生時代中期の住居址や土坑墓が発見された今津遺跡、弥生時代後期から中世までの住居址が発見された高津橋・岡遺跡がある。権谷川の支流である菅野谷川流域の西神ニュータウン内第62号地点A遺跡では、弥生時代中期の住居址、また、対岸のB遺跡では古墳時代後期や中世の住居址が発見されている。権谷川上流域の段丘上に立地する池谷遺跡では古墳時代後期や中世の住居址が確認されている。同左岸の長谷遺跡や権谷中学校内遺跡では中世の火葬墓が、朽木遺跡では中世の遺物が堆積した旧河道内が見つかっている。この朽木遺跡の東方には鎌倉時代に創建された如意寺が存在し、如意寺創建の時期には権谷地区の開発も進み、各所に中世集落が出現していたと考えられる。また、今回の調査地周辺には端谷城の支城があったという伝承もあり、当地に中世の遺構等が存在する可能性もうかがえた。

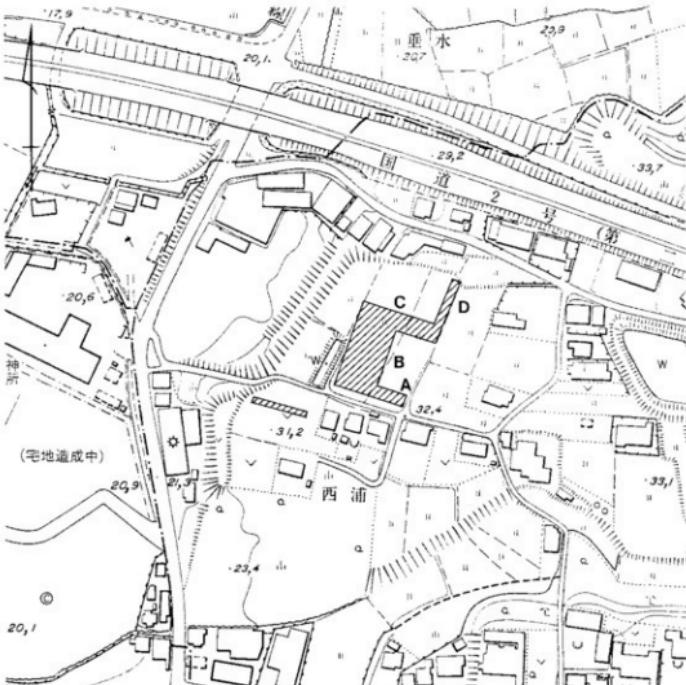


fig. 99
調査地点の位置
と配置 1 : 2500

2. 調査方法と経過

遺物散布地として周知されていた当地域に、水谷地区土地区画整理事業が計画されたため、遺跡の範囲と性格を確認するため、平成元年1月に試掘調査を実施した。事業計画地内に 2×2 mの試掘坑を7箇所設定して試掘調査を行った結果、南西部の試掘坑で2箇所の柱穴を検出した。また、さらに調査範囲を限定するために平成2年11月に再度試掘調査を実施した。再試掘調査は、前回に柱穴が検出された付近を中心に南北にトレンチを1箇所、さらに、北側の計画道路上に東西にトレンチを1箇所設定し調査した結果、南北方向の溝状遺構とピットが検出され、遺構内からは少量の中世頃の遺物が出土した。2度にわたる試掘調査の結果に基づき、今回の調査は計画道路の予定地について、A～Dの4箇所のトレンチを設定して行った。Aトレンチは長さ39m、幅6m、Bトレンチは当初長さ41m、幅6mであったが、掘立柱建物址の一部が検出され、その全体規模を確認するため、両側にそれぞれ5～10mの拡張を行った。Cトレンチは長さ32m、幅6m、Dトレンチは長さ26m、幅3mのトレンチを設定した。耕土を重機により掘削し、その下層については人力により掘削を行った。調査終了後は、重機により調査区を埋め戻した。

3. 調査の概要

基本層序は、調査区南側では、耕土、床土、旧耕土、灰褐色砂質土（遺物包含層）、黄褐色粘質土（地山）である。なお、調査区北側は削平されており、耕土の下層は地山となり、遺物包含層はなかった。

主な遺構としては、Aトレンチからは掘立柱建物址3棟、溝10条（調査区南側に延びる）、土坑5基、ピット多数、Bトレンチは掘立柱建物址2棟、ピット多数、Cトレンチは掘立柱建物址1棟、ピット数基が検出された。Dトレンチからは遺構は検出されなかった。



fig. 100
空から見た調査地区全景（南から）

- 掘立柱建物址** Cトレンチの中央部の調査区北辺に位置する。桁行1間以上（南北1.8m以上）、梁行2間（東西3.4m）の南北棟掘立柱建物址で、主軸方位はN 5° Eである。柱間距離は、桁行・梁間とも1.7mである。北側部分については調査区外に延びるため規模は不明である。
- SB01** AトレンチとBトレンチの交差する調査区南部に位置し、南西部分はSB03と重複する。桁行3間（南北6.6m）、梁行2間（東西4.4m）の南北棟掘立柱建物址で、主軸方位はN 16° Eである。柱間距離は、桁行で2.3m、中央部で2.0m、梁間で2.3mである。
- SB02** Aトレンチの中央部に位置し、北東部分がSB02と重複し、西側のSB04と並列している。桁行4間（東西7.4m）、梁行3間以上（南北6.6m以上）の東西棟掘立柱建物址で、



fig. 101
調査区平面図

主軸方位はN 20° Eである。柱掘形が東側梁で1箇所、その西側で1箇所重複しており、部分的に柱の建て替えが行われている。柱間距離は、桁行で2.1m、中央部分で1.6m、梁間で2.4m、北側部分では1.7mである。

SB04 Aトレンチの西側に位置し、SB03と並列している。桁行4間（東西10.0m）、梁行3間以上（南北6.6m以上）の東西棟掘立柱建物址で、主軸方位はN 66° Wである。この建物も東側梁で1箇所掘形が重複しており、柱の建て替えが行われている。柱間距離は、桁行で2.2m、中央部分で3.2m、梁間で2.2mである。

SB05 Bトレンチの中央部に位置する。桁行2間（南北6.4m）、梁行2間（東西4.4m）の南北棟掘立柱建物址で、主軸方位はN 6° Eである。柱間距離は、桁行で3.1m、梁間で2.1mである。

SB06 Bトレンチの中央部西側に位置する。桁行4間（東西7.5m）、梁行2間（南北4.8m）の東西棟の掘立柱建物址で、主軸方位はN 81° Eである。桁側の東西面に距離1.8mでそれぞれ窓をもつ。柱間距離は、桁行で1.8m、梁間は北側で3.3m、南側で2.0mである。

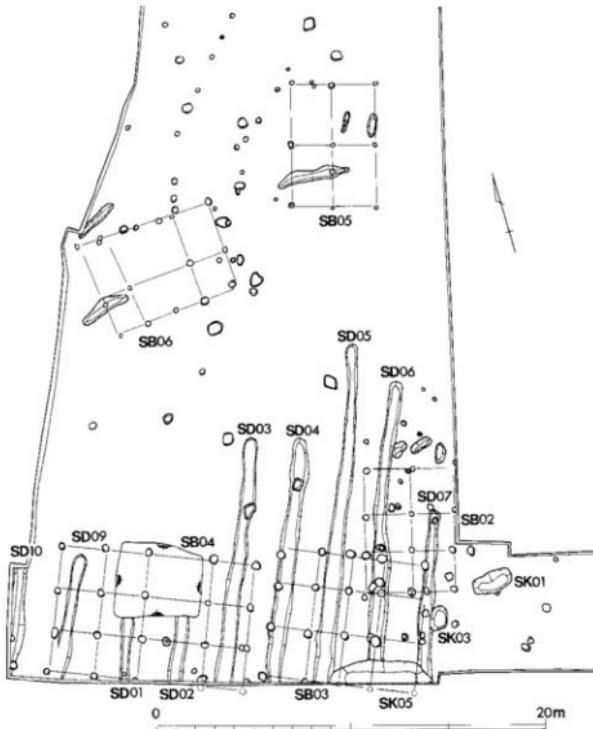


fig. 102 Bトレンチ
遺構平面図

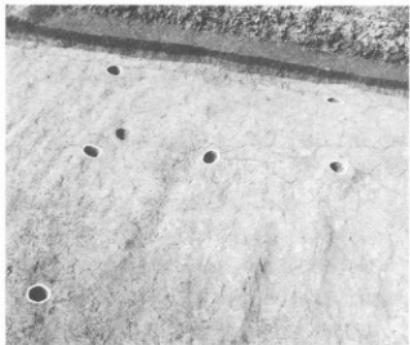


fig. 103 C トレンチSB01全景（南から）

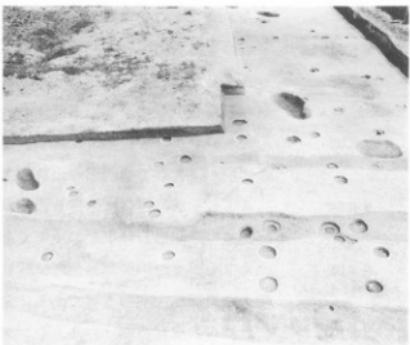


fig. 104 B トレンチSB02全景（西から）



fig. 105 B トレンチSB03全景（北から）

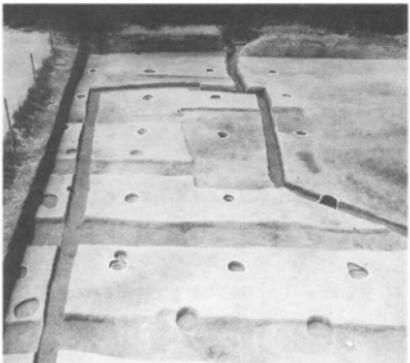


fig. 106 B トレンチSB04全景（東から）



fig. 107 B トレンチSB05全景（西から）

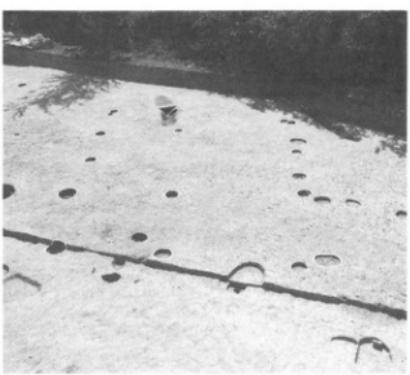


fig. 108 B トレンチSB06全景（東から）

土坑	Aトレンチの中央部に位置する。東西長2.1m、南北幅1.0m、深さ40cmで、断面形がU字形の不整椭円形の土坑である。
S K 02	Aトレンチの西側に位置する。南北長1.4m、東西幅60cm、深さ30cmで、断面形がU字形の不整椭円形の土坑である。
S K 03	Aトレンチの中央部に位置し、S D07を切る。南北長1.2m、東西幅90cm、深さ20cmで、断面形が逆台形で椭円形の土坑である。
S K 04	Aトレンチの西側に位置し、S D08を切る。南北長90cm以上、東西幅80cm、深さは最深部20cmの断面形がU字形の土坑である。全体規模は、調査区外に拡がるため不明である。
S K 05	Aトレンチの中央部南側に位置し、S D05～07を切る。東西4.8m以上、南北1.2m以上、深さは最深部90cmの土坑である。全体規模は、調査区外に拡がるため不明である。
溝状遺構	これらの溝状遺構は、Aトレンチ、Bトレンチの南側にかけて南北方向に走る。S D08を除いては、溝間距離1.8mではほぼ一定間隔で並んでおり、長さは調査区外に延びるため判らないが、幅はほぼ90cmである。深さは浅いところで4cm、深いところでも8～14cmと比較的浅い。
出土遺物	出土遺物の量は少なく、Cトレンチ、Dトレンチではほとんど出土しなかった。掘立柱建物址に伴う遺物としては、S B03の柱穴底から11世紀前半頃の須恵器碗が出土し、別の柱穴からは長胴甕となる土師器片が出土している。S B05の柱穴内からは時期不明の須恵器片が出土したのみで、S B06の柱穴内から須恵器坏と土師器碗が出土しており9世紀後半以降のものと考えられる。S K01～04からの出土遺物はほとんどなく、S K05からは近世以降のものと思われる陶器・磁器・瓦類が出土している。S D01～10は中世頃の須恵器片、土師器片が少量、S D04の埋土内からは須恵器鉢の底部が出土している。
4.まとめ	今回の調査で検出された主要な遺構は、平安時代に建てられた掘立柱建物址6棟、中世の溝状遺構10条、中世以降の土坑5基等である。掘立柱建物址は調査区南側に集中している。なお、北側については、遺構面が削平されており、掘立柱建物址1棟を検出したのみで他の遺構については不明である。S B03とS B06から柱穴内で土器が出土したが、他の建物は柱穴内からの土器の出土がなく時期は不明である。S B04はS B03と主軸方位がほぼ同じであり、S B03と相前後する時期に建てられたと考えられる。また、S B02はS B03と一部重複しており、S B03の建てられた時期の前後と考えられ、S B05と主軸方位が同じことから、同時期あるいは近い時期の建物と考えられる。掘立柱建物址は、9世紀以降にS B06が建てられ、S B03が建てられた11世紀前半頃に前後してS B02、S B04、S B05が同時に建てられたと考えられる。
S D01～10	溝状遺構は南北方向に走る溝で、調査区南側に集中して検出された。出土遺物から12世紀頃と考えられる。S K01～04からは出土遺物がほとんどなく、時期・性格等は不明である。しかし、S K03、S K04のように溝状遺構を切っているものがあり、溝状遺構よりは新しい時期のものである。その他、ビットが多数検出されているが、建物としてはまとまらなかった。ただし、建物の掘形と重複あるいは近くに存在するビットがあるが、これらは柱の建て替えを行ったか、建っている柱の横に新しい柱を建て補強を行ったものと考えられる。

こうづばし・おか 10. 高津橋・岡遺跡 第3次調査

1. はじめに

高津橋・岡遺跡は、明石川の支流である榎谷川と天上川に挟まれた南北に長い段丘面に立地しており、段丘面と沖積地との比高差は約15mである。この段丘面の北端では弥生時代の甕棺墓が発見され、さらに北側の万願寺谷を隔てた玉津中学校の校庭では、弥生時代末～古墳時代初頭の壺棺も発見されている。以上のように、榎谷川左岸の段丘面には、弥生時代中期～古墳時代前期の遺跡が点在している。また、南方の沖積地には、弥生時代前期～平安時代の遺跡が存在する新方遺跡が所在する。

高津橋・岡遺跡におけるこれまでの調査では、第1次調査において、平安時代末～鎌倉時代初頭の掘立柱建物址4棟、古墳時代後期の堅穴住居址8棟、弥生時代後期の堅穴住居址1棟等をはじめ多くの遺構・遺物を検出した。今回の調査地に南接する第2次調査においても、奈良時代後半～平安時代の掘立柱建物址3棟、古墳時代後期の堅穴住居址2棟を検出している。

今回の調査は、会社事務所の改築工事が計画され、周知の遺跡内であることから、平成3年9月26日に試掘調査を実施した。調査の結果、遺構および遺物包含層が確認されたため、建物の基礎部分に限定して発掘調査を実施することになった。

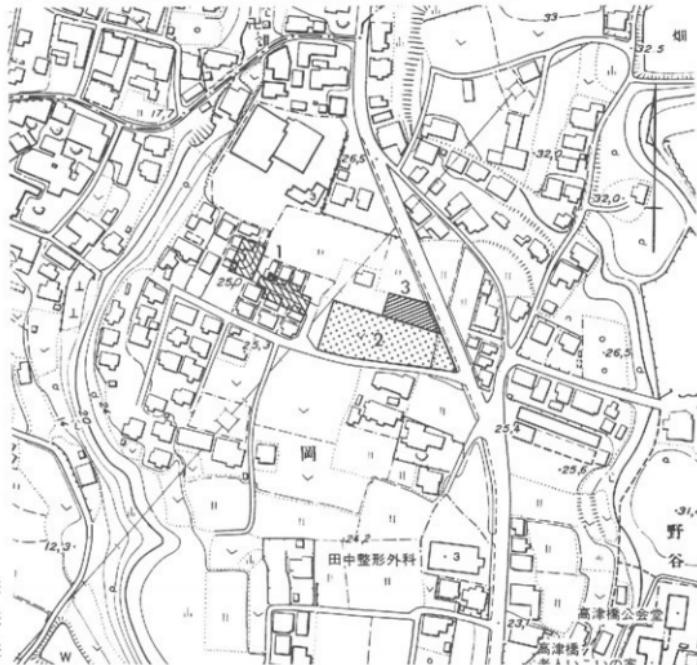


fig. 109
調査地点の位置
1:2500

1 第1次調査

2 第2次調査

3 第3次調査

2. 調査概要

調査区は8箇所に分かれており、北側列西側よりA～D区、南側列西側よりE～H区と呼称した。

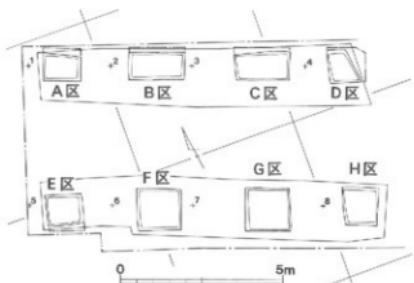


fig. 110 調査区設定図



fig. 111 調査区全景 (東から)

まず、重機により北側列および南側列をそれぞれコンクリートおよび盛土を除去し、その後各区ごとに人力により掘削した。なお、敷地境界に既存のコンクリートブロックが存在し、また、敷地北東隅には電柱が存在しており、それらの保全のため、一部調査不能な箇所があった。調査区内の層序はほぼ同一で、基本層序は、盛土、旧耕土、灰黄色シルト質細砂、黄茶色シルト質細砂、(暗)灰茶色砂質シルト(遺物包含層)、(淡)灰茶色砂質シルト(遺物包含層)、暗茶褐色礫混じり細砂(地山面)である。

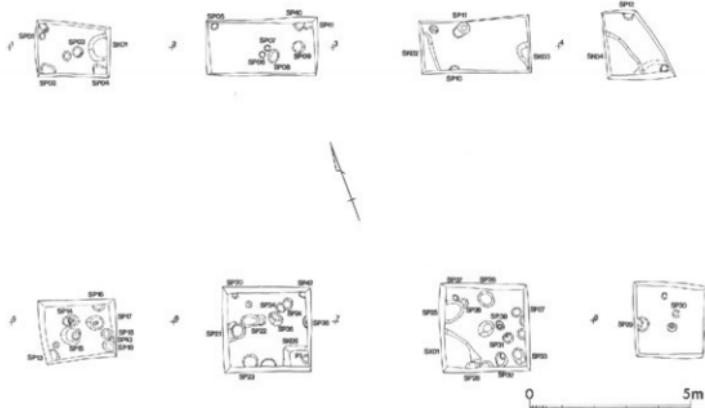


fig. 112 調査区平面図

A区

A区では、土坑状遺構1基とピット6基を検出した。

S K01

S K01は、東側が調査区外に延びるが、調査区の規模は、長径78cm、短径58cm、深さ36cmの土坑状遺構である。

B区

B区では、径20cm前後のピット7基を検出した。S P09の埋土中から奈良時代の平瓦が出土している。

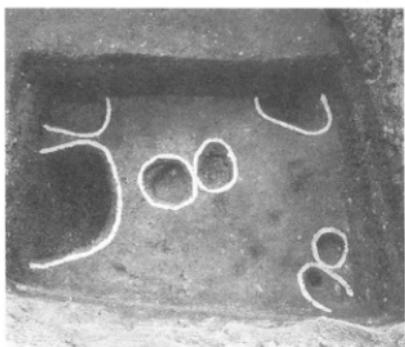


fig. 113 A区全景 (北から)



fig. 114 E区全景 (北から)

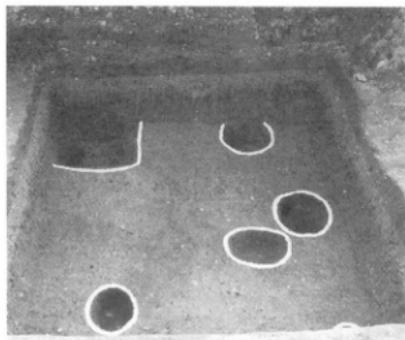


fig. 115 F区全区 (北から)

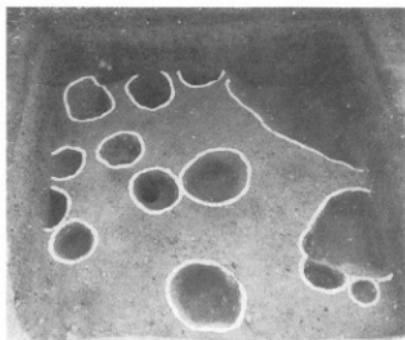


fig. 116 G区全景 (北から)

C区

C区では、土坑状遺構2基とピット3基を検出した。

SK02

SK02は、調査区西端で検出した土坑状遺構で、調査区外に延びる。調査区内の規模は、長径1.23m、短径45cm、深さ9cmである。SK03は、調査区西端で検出した土坑状遺構で、調査区外に延びる。調査区内の規模は、長径86cm、短径35cm、深さ55cmである。

D区

D区では、土坑状遺構1基、ピット2基、落ち込み1基を検出した。

SK04は、南西隅で検出した土坑状遺構で、一部が調査区外に延びている。調査区内の規模は、長径1.36m、短径1.0m、深さ10cmである。埋土中に奈良時代の須恵器片、土師器片を多量に含む。

下層で落ち込み1基を検出したが、遺物が出土しておらず、詳細は不明である。埋土は、茶灰色シルトである。

E区

E区では、ピット9基を検出した。SP14・17は、内部に礎盤と考えられる石を含み、SP19・43は、埋土中に炭片を含む。

F区

F区では、土坑状遺構1基とピット12基を検出した。

S K 05

S K 05は、南東隅で検出した土坑状遺構で、調査区外に延びる。調査区内での規模は、長径75cm、短径62cm、深さ23cmである。内部で径28cmのピット1基を検出した。S P 36は、内部に礎盤と考えられる石を含む。

G区

G区では、土坑状遺構1基とピット14基を検出した。

S X 01は、南東隅で検出した土坑状の遺構で、調査区外に延びる。調査区内の規模は、長径1.2m、短径1.1m、深さ30cmである。

H区

H区では、ピット4基を検出した。

S P 29

S P 29は、約3分の1が調査区外に延びるが、径44cm、深さ30cmのピットで、内部に礎盤と考えられる表面が平滑な石を含む。

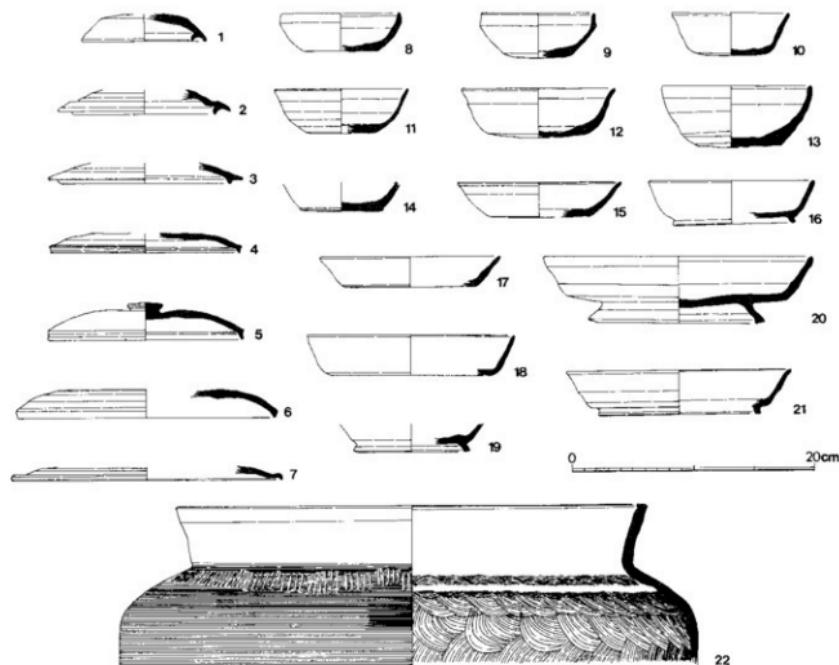


fig. 117 出土須恵器実測図

3.まとめ

今回の調査では、土坑状遺構6基、ピット約50基の遺構を検出したほか遺物包含層中からも多量の土器が出土した。遺構の埋土は概ね(淡)灰茶色砂質シルトで、7~8世紀の遺物が多数出土した。調査面積の制約のため、掘立柱建物等を復元することは困難である。また、南接する第2次調査で検出された遺構との関連についても、現段階では不明である。なお、第1次調査で検出されたような、弥生時代の遺構・遺物は検出されなかった。

11. 新方遺跡大日地点 第2次調査

1. はじめに

新方遺跡は、山陽新幹線敷設に伴う調査によって明らかになった遺跡で、昭和45年度の調査では弥生時代中期初頭から鎌倉時代の遺物が多量に出土し注目された。

この後、国庫補助金を得た範囲確認調査や民間の小規模開発に伴う発掘調査が実施され、その度毎に新方遺跡が大規模で重要な遺跡であることが確認されてきている。

特に、昭和57年度に実施した大日地点第1次調査では、古墳時代後期（6世紀初頭）の玉造工房址とそれに伴う多量の玉製品や未製品が出土している。

今回の調査は、都市計画道路明石・木見線の拡幅工事に伴うもので、神戸市都市計画局の委託を受けて、幅約4m、長さ約30mについて調査を実施した。



第1遺構面 調査区内のはば中央を南北に延びる畦畔を1条検出した。近代の溝により破壊されているので、幅は不明であるが、高さ10~15cm前後の断面が台形の畦畔である。基盤層となる灰褐色シルト層が水田耕土と考えられ、この土層内から中近世の土器が出土しており、江戸時代の水田と考えられる。

第2遺構面 江戸時代の畦畔を除去したところ、同じ位置に畦畔を検出した。上端幅約40cm、下端幅約80cm、高さ5cm前後の断面が台形の畦畔である。畦畔の西に接して幅約30~40cm、深さ5~10cmの溝が1条、同方向に延びている。基盤層となる灰色シルト層が水田耕土と考えられ、この土層内から中世の須恵器・土師器が出土しているので、中世の水田と考えられる。



fig. 119 第1遺構面全景（南から）



fig. 120 第2遺構面全景（南から）

第3遺構面 第2遺構面から約60cm下層の黒褐色シルト層上面で、掘立柱建物址1棟と溝3条を検出した。また、調査区北側は黒褐色シルト層を切るように青灰色極細砂が堆積しており、自然流路の肩を検出した。

掘立柱建物址 調査区中央部分で検出したもので、柱穴5基のみ調査区内で、大部分は調査区外である。2間×2間以上の総柱の建物で、柱間は約1.7mである。柱掘形は径60~70cm、深さ30~40cmの不整円形で、柱痕は径約20~25cmである。

SD 01~03 3条とも幅50~60cm、深さ10~30cmの溝である。

掘立柱建物址および溝の埋土から6世紀中頃の須恵器・土師器が出土している。また、SD 02からは管玉未製品が1点、包含層からは勾玉1点、管玉2点、臼玉が10数点出土している。

自然流路 南側の肩を検出したが、幅は不明である。鋼矢板の安全性が確保できる深さまでの掘削にとどめたため、流路の底まで到達できなかったが、検出面から約2.5m掘削した。

流路は青灰色極細砂・灰黄色中砂～粗砂、暗灰色砂礫、暗褐色極細砂～シルト、灰色砂礫、茶灰色細砂～中砂と堆積しており、青灰色極細砂、暗褐色極細砂～シルト、灰色砂礫中に多量の遺物が含まれている。遺物の時期幅も大きく、弥生時代中期から7世紀代のものがあり、7世紀代のものには完形品も含まれている。また、注目すべき遺物として、器

形不明の丹塗りの土器片が1片出土している。おそらく、新方遺跡の包含層を削りながら7世紀代に流动していた流路であろうと考えられる。

第3遺構面の基盤層である黒褐色シルト層中には、多量の弥生土器とともにサヌカイト剥片、石器類、碧玉剥片、玉類が含まれている。そのため、この層を水洗したところ、石鎌約70点、石錐約5点、磨製石斧2点、磨製石包丁2点、管玉約5点、管玉未製品2点、ガラス小玉3点が出土した。

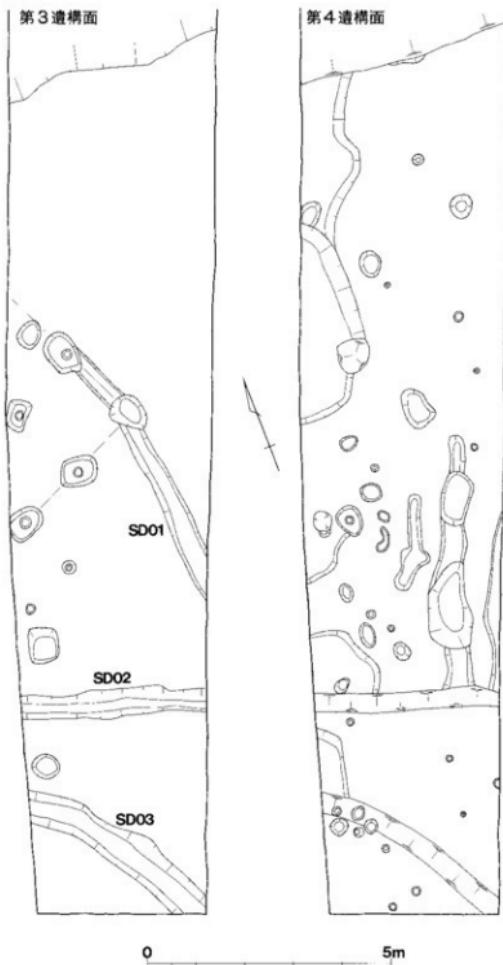


fig. 121

第3遺構面・第4遺構面平面図

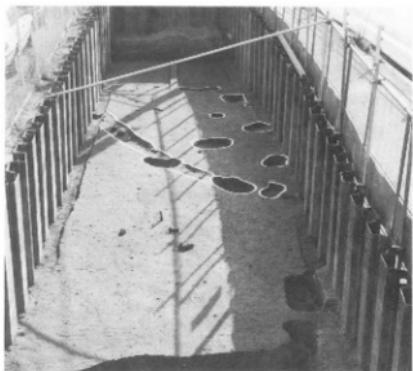


fig. 122 第3遺構面全景（北から）



fig. 123 第4遺構面全景（北から）

第4遺構面 黒褐色シルト層を除去したところ、灰褐色シルト上面でピット28基、土坑2基、溝1条、落ち込み4基を検出した。

ピット 径15~50cm、深さ15~35cmであるが、建物としてまとまるものはなかった。

土坑 長さ1.8m、幅80cm、深さ20cmの不整形の土坑と長さ1.1m、幅50cm、深さ20cmの不整形の土坑がある。

溝 長さ5.2m、幅50cm、深さ10cmの南北に延びる溝である。

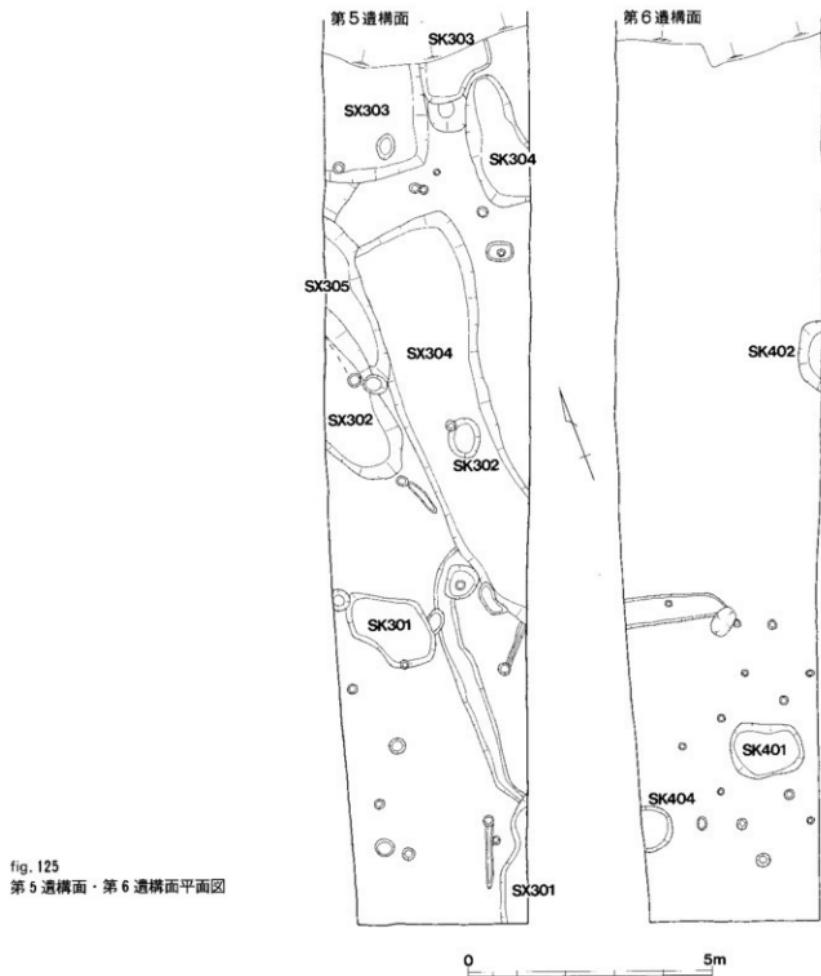
落ち込み いずれも調査区外へ延びていくもので、規模は不明である。

これらの遺構の埋土からは弥生第Ⅲ様式の土器が多く出土しているため、第4遺構面の時期は弥生時代中期中葉であると考えられる。

第5遺構面 第4遺構面の基盤層である灰褐色シルトを除去すると、暗灰色シルト層上面でピット21基、土坑5基、溝1条、落ち込み6基を検出した。



fig. 124 第5遺構面南半全景（北から）



ピット 径20~50cm、深さ15~60cmであるが、建物としてまとまるものはなかった。

S K 301 長さ2.1m、幅1.2m、深さ20cmの不整形の土坑である。

S K 302 長径80cm、短径60cm、深さ15cmの楕円形の土坑である。

S K 303 自然流路によって削られていて、規模は不明である。

S K 304 長さ2.8m、幅1.2m、深さ15cmの不整形の土坑である。

S K 305 S K 303とS K 304に切られているが、径90cm、深さ50cmの土坑である。

溝 現存長約5.1m、幅50cm、深さ5~10cmの溝である。

- S X301 調査区南端で検出した落ち込みで、規模不明、深さは10~15cmである。
- S X302 長さ3.5m以上、幅1.6m、深さ30cmの小判形の土坑であるが、西半部は調査区外である。
- S X303 長辺2.5m以上、短辺1.8m以上、深さ60cmの落ち込みで、北側は自然流路によって削られ、西半部は調査区外である。
- S X304 幅2m、長さ8m以上、深さ40~50cmの落ち込みで、南に延びているが、調査区外である。
- S X305 S X302とS X304に切られており、規模不明で、深さは60cmあり、西半部は調査区外である。
- S X306 S X303とS X305に切られており、規模不明で、深さは20cmあり、大部分が調査区外である。

これらの遺構のうち、S X303からは大量の土器とともに骨や角、碧玉原石、管玉が出土している。S X304からは大型の壺が圧し潰された状態で出土している。また、S X304がある程度埋まった段階で、猪の下顎骨が2頭分検出された。おそらく、猪の頭蓋骨を捧げて祭祀を行ったと思われる。これらの遺構からは弥生第II様式の土器が多量に出土しており、第5遺構面の時期は弥生中期前葉であると考えられる。

第6遺構面 第5遺構面の基盤層である暗灰色シルトを除去したところ、灰緑色砂質シルト上面でピット14基、土坑2基、溝1条を検出した。



fig. 126 S X303平面図



fig. 127 S X303土器出土状況 (東から)

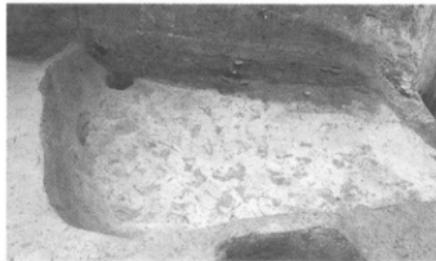


fig. 128 S X303完掘状況 (東から)



fig. 129 S X 304全景（南から）



fig. 130 S X 304壺出土状況
(南から)



fig. 131 S X 304猪の下顎骨出土状況
(南から)



fig. 132 第6遺構面南半全景（北から）

ピット 径15~20cm、深さ15~30cmの小さなピットで、建物としてまとまるものはない。

S K401 長径1.4m、短径1.0m、深さ40cmの楕円形の土坑である。

S K402 長径1.4m、短径50cm以上、深さ40cmの楕円形の土坑であるが、東半部は調査区外である。

溝 長さ2m以上、幅約50cm、深さ約5cmの東西に延びる浅い溝で、西側は調査区外へ延びている。

これらの遺構からの遺物の出土は少なく、ほとんどが小破片のため時期を確定することは困難であるが、SK401より弥生第II様式の初め頃の甕の破片が出土している。しかし、この土器が遺構の時期を表すのかどうかは不明である。

3. まとめ 今回は調査面積が限られたものであったため、遺跡の性格を明らかにすることはできなかったが、新方遺跡の玉造りが弥生時代中期にまでさかのぼり、兵庫県下で最古の例であることが明らかになった意義は大きい。また、弥生時代中期の紀伊の土器も多く出土しており、当時の地域交流を考える上で興味深い資料を提供することになった。



fig. 133
出土したII様式
の弥生土器
(楠華堂撮影)

たかつかやま 12. 高塚山古墳群 第1次調査

1. はじめに

垂水区多聞町字小東山に所在する高塚山古墳群は福田川と伊川に挟まれた丘陵上に存在する。これまでに分布調査や試掘調査で13基の古墳の存在が確認されている。

今回古墳群の一部が資材置場の造成予定地にあたるため、3基の古墳について発掘調査を実施した。また、この周辺を調査したところ新たに2基の古墳の発見があった。

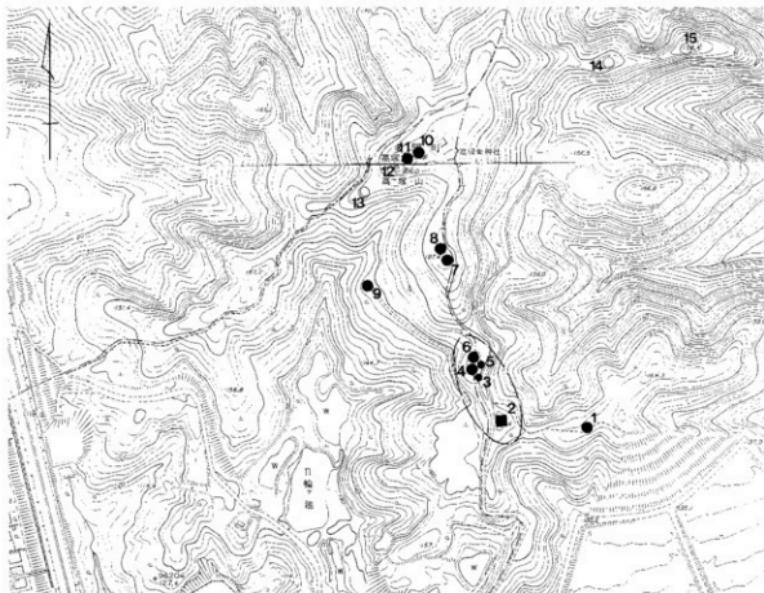


fig. 134
高塚山古墳群
分布図
1 : 5000

2. 調査の概要

(i) 2号墳

墳丘は一辺11mの方墳と想定されるが、削平や流失が激しい。墳丘を画する周溝は、認められなかったが、墳丘の裾は地山を削り出している。墳丘を築造するにあたっては、墳丘の裾を削り出すとともに、盛土をして平坦面をつくりだすことから始めている。この平坦面の上面で須恵器甕の破片がわずかに出土している。次に、石室を納める墓壙が掘られ、石室の構築が進められる。墓壙肩のレベルは、側壁最上段と一致し、ここから墳丘の築成が始まっている。墳丘の盛土には砂礫土を60~80cm積み上げているが、中には凝灰質砂岩の破片が10cm程度入っている。石室の石材を調整する時に出たものを盛土の中に入れた可能性がある。

墳丘裾出土の遺物

墳丘西側の裾部で、須恵器の甕が破片となって1個体がかたまって出土している。墳丘の裾に据えていた可能性が高い。

石室

石室は凝灰質砂岩を用いた右片袖式のもので南に開口する。全長7.1m、玄室長3.6m、同幅1.4m、羨道幅1.2mである。現存高は1.7mであるが、当初の高さは天井石のすべて



fig. 135 1～6号填全景（北方上空から）



fig. 136 2～6号填全景（南上空から）

を失っていることから確定できない。しかし、両側壁の現存最上部はその石材の積み方や天井石の落ち込み方からしてほぼ最上位に近いものと思われる。

石室と墳丘の位置関係は、玄室中央部あたりが墳丘の中心にあたる。石室壁面は、基本的には玄室を3段、羨道2段に積んでいる。石室構築にあたっては、基底石をほぼ垂直に立てるはかは、早くも少しづつ持ち送っている。石面には、石を割った時のたがねの跡や、のみ状の工具で石面を整えた痕跡が残っている。概ね、羨道部の側面は、割ったままの状態の石材が多いが、玄室は、石材を割った後に、のみ状工具で丁寧に石面を整えた石材が多い。



fig. 137 2号墳石室全景
(南から)
(牛嶋茂氏撮影)



fig. 138 2号墳石室全景
(南より)
(牛嶋茂氏撮影)

線刻画

玄室入口の左側壁（東側）の2段目の一石が他の石材にくらべ表面が丁寧に調整され、この面に馬などの図を線刻している。線刻は、石の右側から「甲」の字に見えるものと、中央に馬、その左に三角や縦横の直線を連続させた家かと思われるものが描かれた構図となっている。馬は、たてがみを立てて、頭を右に向けて、前脚をわずかに曲げて立っており、背中には、鞍のような表現もみられる。また、この石材を置くために隣の石材をのみ状工具によって削ったり、線刻画の石材の下に座りを良くするための砂利を敷いていた。



fig. 139 2号墳玄室左側壁の線刻画石材の位置（南西より）
(牛嶋茂氏撮影)



fig. 140 2号墳左側壁の線刻画近景（西から）
(牛嶋茂氏撮影)

**石室床面の
状況**

床面は2面存在したが、上面の床面は中世の再利用があったと考えられ、鎌倉時代の須恵器・土師器が羨道から前庭部にかけて散乱していた。この面でも、6世紀末から7世紀の須恵器が出土しているが、中世等の搅乱によって原位置を保っていない。

下層の床面には、板石を敷いていたと考えられるが、後世の擾乱がこの面にもおよんでおり、一部しか残っていない。玄室北東隅の敷石上には、ほぼ原位置を保っている6世紀末頃の須恵器壺以外は、後世の搅乱のよって玄室内に須恵器片や金環、鉄製品が散乱していた。

**墓道と出土
遺物**

羨道から石室外へ幅約2mの墓道が掘られていた。この底面からほぼ完形の須恵器長頸壺や壺が1個体出土している。この須恵器壺の中には、金環1点が存在していた。このほか、墓道の延長線にあたる斜面から須恵器や土師器の細片と共に金環1点が流土から出土した。

**(2) 3号墳
墳丘と石室**

今回の調査で新たに発見された古墳である。4号墳の墳丘裾、南側に築造している。墳丘はほとんどなく、外形は不明瞭であるが、東側に溝を掘った痕跡が認められた。

石室は、凝灰質砂岩の割石を使用した無袖式で、全長3.2m、幅1.2m、高さ60cmの小型のものである。石材は、亂雑に積み上げられているが、基本的に玄室を3段、羨道を2段に積んでいる。奥壁や側壁の一部の基底石は、板石を立てて使用し、上段に比較的大きな石材を積んでいるため石室の崩廻が激しい。天井石もすべて落ち込んでいたが、盗掘を受けた痕跡はなかった。

**石室床面
の状況**

玄室の床面には、板石を敷いており、玄室と羨道の境にあたる所にも幅約25cmで東西に板石を敷いている。羨道部には、敷石はなく拳大～人頭大の石を充満させた閉塞石があった。遺物は、玄室の北西隅に須恵器の蓋と壺が口縁部を合わせた状態で出土している。出土遺物から6世紀末ごろに築造されたものと考えられる。



fig. 141 3号墳石室全景
(東から)
(牛嶋茂氏撮影)

- (3) 4号墳
- 墳丘は後世の削平や流失によって不明瞭である。径12m程度の円墳と考えられる。幅約2 mの溝が巡っているが、この古墳に伴うかは断定しがたい。盛土は、失われ岩盤が露出している。
- 墳丘据出土の遺物
- 東側の墳丘裾で、須恵器壺、蓋、甕などの破片がかたまって出土しているが、後世の削平によって大半が失われたものと考えられる。また、北東裾においても土師器の甕かと推定される破片がかたまって出土している。
- 石室
- 盗掘を受けており搅乱が激しい。石材はほとんどが基底石だけを残すのみとなっており、北側壁の東半を失っている。北側壁の石材抜き取り状況から東に開口する左片袖式の横穴式石室と考えられる。規模は、全長4.9m、玄室長推定3.0m、同幅1.2m、羨道幅85cmで現高70cmである。すでに、基底石から内側に内傾している。
- 石室床面の状況
- 床面は、地山を平坦に削ったもので、玄室の中央、奥壁の近くで耳環2点、袖石があつたあたりに銀環が1点、右側壁に沿うように鉄製刀子が1点出土している。羨道からは、6世紀後半から末頃の須恵器の甕や壺、短頸壺の破片がかたまって出土している。

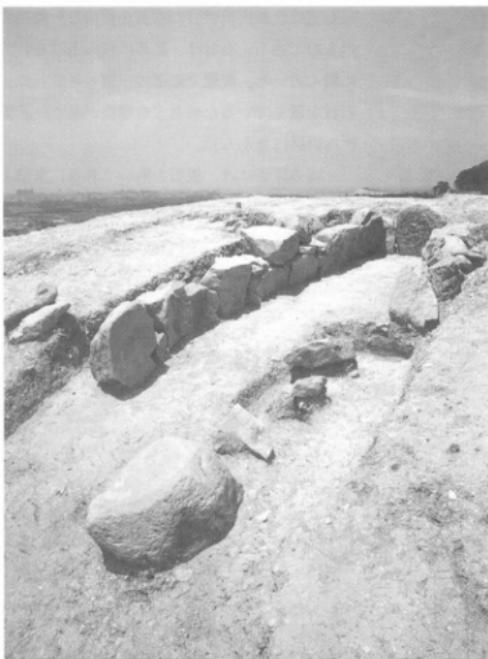


fig. 142 4号墳石室全景（北東から）
(牛嶋茂氏撮影)

- (4) 5号墳
- 3号墳と同じく4号墳の墳丘裾に築造している。後世の林道によって大きく削られ、石室の掘形と石材が抜き取られた痕跡が残っていただけであった。須恵器の破片がわずかに出土したのみで時期は不明である。おそらく、3号墳と同じく小型の横穴式石室があったものと考えられる。

(s) 6号墳
墳丘と規模

墳丘は、北東半を後世の削平によって失われているが、検出された周溝から南北約12m、東西約13mの円墳であることが判った。墳丘を画する周溝は、幅2~3m、深さ約30cmである。古墳は南から北に伸びる尾根の緩やかな傾斜面を利用して築造しており、南側の周溝は尾根の斜面を大きくカットしている。

石室を納める墓壙肩のレベルは、石室の2段目の高さに一致しており、ここから墳丘の盛土を開始している。尾根の傾斜面を利用しているため、北側の盛土は80cmと厚いが、南側は40cm程度である。また、墓壙の周囲の旧地表面からは、L字形に並べた人頭大の角礫を検出した。

石室

凝灰質砂岩を用いた右片袖式の横穴式石室で、西に開口している。石室の規模は、全長6m、玄室長3.5m、同奥壁部幅1.2m、同袖部幅1.4m、羨道幅1.1mである。高さは天井石を失っているため確定できないが、現高で1.7mである。側壁の積み方から最上段に近いものと考えられる。

石材は乱雑に積み上げられているが、基本的には玄室を3段、羨道を2段に積んでいる。側壁は、3段目からわずかに内側に持ち送っている。石材の表面には、のみ状の工具による加工痕がわずかに確認された。

石室床面

最初に埋葬が行われた床面には、羨道だけに板石を敷いている。羨道入口の板石は、他の石より大きく、のみ状工具で丁寧に表面を平らに加工している。この石の東側には、板石を縦に埋め込んでいる。また、加工痕のある板石の周辺には、赤色顔料が入った須恵器甕・長須壺が出土している。これらの羨道部の敷石を取り除くと、幅15cmの排水溝が検出された。先述の縦に埋め込まれた板石は、この排水溝を塞いでおり、石も排水溝の形に割っていた。排水溝の中からは、6世紀後半頃の須恵器の坏や蓋の破片がたまつて出土している。玄室からは、鉄釘や馬具などの鉄製品の破片や、須恵器の蓋坏・高坏などが出土している。追葬が行われた床面は、最初の床面の上に15cmほどの土を盛っている。床面か



fig. 143 6号墳石室全景
(北東から)
(牛嶋茂氏撮影)

らは、鉄釘片や少量の須恵器の破片が出土しているが、中世以降の掠乱によって原位置を保っていない。

墓道と出土遺物 墓道から石室外へ幅約2mの墓道が掘られていた。この底からは、ほぼ完形の須恵器高环や蓋等が出土している。この他、前庭部でも完形の須恵器高环や蓋の破片が出土している。これらの遺物は、土層の観察により石室内から掻き出された土の中に含まれていることが判った。

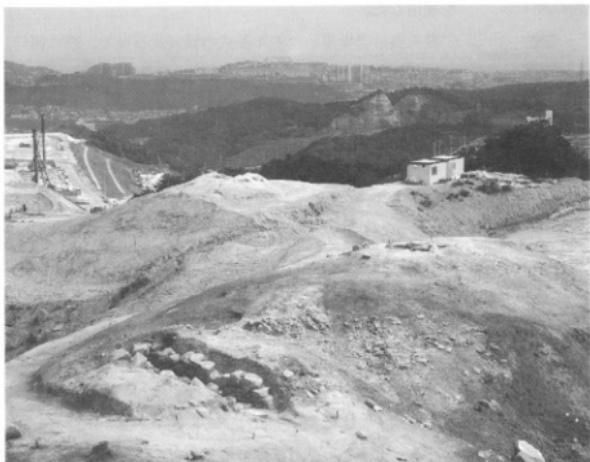


fig. 144 2・4・6号墳全景
(北から)
(牛嶋茂氏撮影)

3.まとめ

高塚山古墳群の存在は古くから知られていたが、その実態は分布調査や試掘調査のみで知られるところであった。今回の調査で、古墳群中の約3分の1にあたる5基を調査したことによってその実態が明らかになりつつある。

調査を行った5基の古墳の埋葬施設はいずれも横穴式石室で、6世紀後半から6世紀末頃に築造されたことが明らかになった。5基の横穴式石室は凝灰質砂岩をのみ状工具で整形した石材をもって築造したものや、石室全長が3mのものなど多様である。

特に、線刻壁画のある古墳の発見は、神戸市内では初めてで、県下でも今回のもので5例目となった。この地域の線刻壁画古墳を考える上で貴重な発見となった。

13. 垂水・日向遺跡 第5次調査

1. 調査の経過

垂水・日向遺跡は、福田川によって形成された沖積地に位置し、標高はT.P. 4～7 mである。昭和63年度、本市教育委員会の調査（第1次調査）によってここに平安時代を中心とする集落址、さらにその下層には縄文時代の土器を含む流路などが発見された。その後、数次にわたる調査によって遺跡の広がりが確認されてきている。

今回の調査区は市道を挟んだ第1次調査地の西隣にあり、平成2年度に行われた第3次調査地の南に続く部分である。



fig. 145
調査地点の
位置 1:2500

2. 調査の概要

今回の調査地は層序の異なる遺構面が3面以上存在する。

基本層序としては、南側では、表土、盛土下に主に中世の遺物包含層である黄灰色～淡灰黄色土、淡灰色土そして第1遺構面のベース層となる灰色粘土があり、古墳時代～古代の遺物包含層である暗灰色粘質土、暗褐色粘質土を経て第2遺構面のベース層である淡黄褐色シルトになる。北側は、地形的に高くなっている表土、盛土下すぐに第2遺構面に対応すると思われる淡黄褐色シルト～黄褐色粘質土となる。

上 面

表土、盛土下において水路および暗渠を検出した。水路は調査区の東側に約半分の幅で、深さ1.5m前後である。暗渠は拳大の石の入ったもので、ともに近現代のものと考えられる。この他、耕作痕なども検出された。

第1遺構面 調査区の南側約半分において堆積する灰色粘土をベースとするもので、掘立柱建物址を含む多数のピット、溝、土坑などを検出した。部分的に、整地層の痕跡が認められ、遺構の切り合いなどからも考えて、数次にわたる土地利用があったようである。

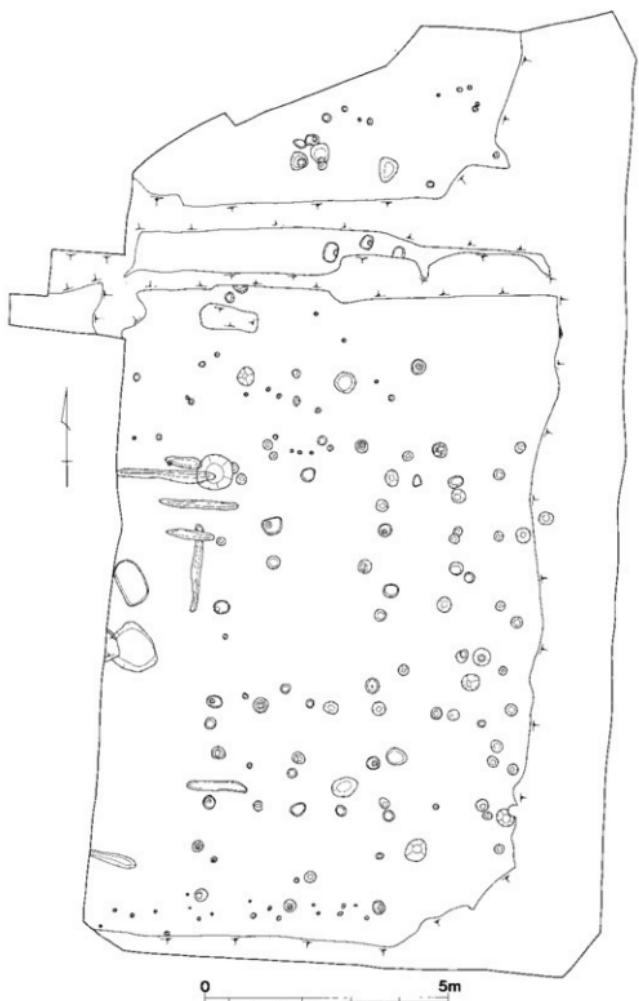


fig. 146 第1遺構面平面図

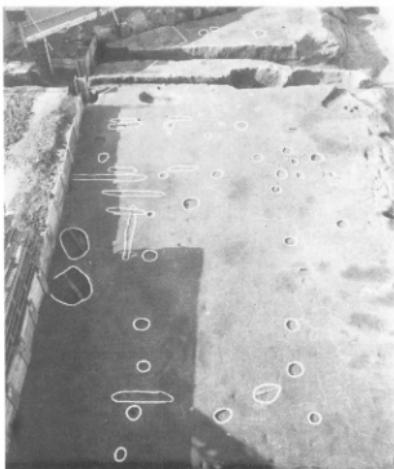


fig. 147 第1遺構面全景
(整地層上面)
(南から)

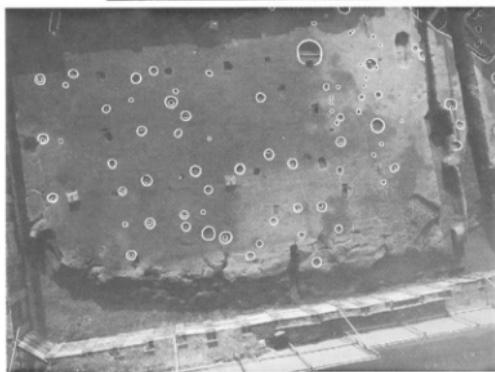


fig. 148 第1遺構面全景 (空中写真)

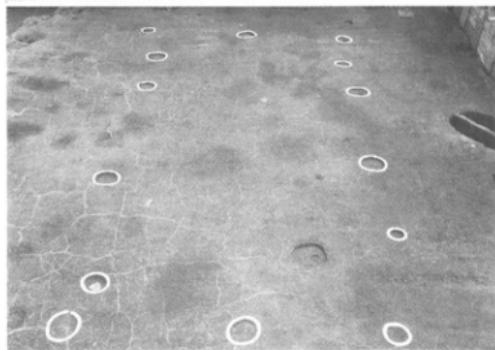


fig. 149 第1遺構面掘立柱建物址
(北から)

第2遺構面 第1遺構面のベースである灰色粘土および暗灰色粘土、さらに部分的に堆積する古墳時代～古代の包含層である暗褐灰色粘質土を除去すると第2遺構面となる淡黄褐色シルトとなる。これは北側においては黄褐色粘質土に変わる。掘立柱建物址1棟、竪穴住居址2棟、溝などが検出された。

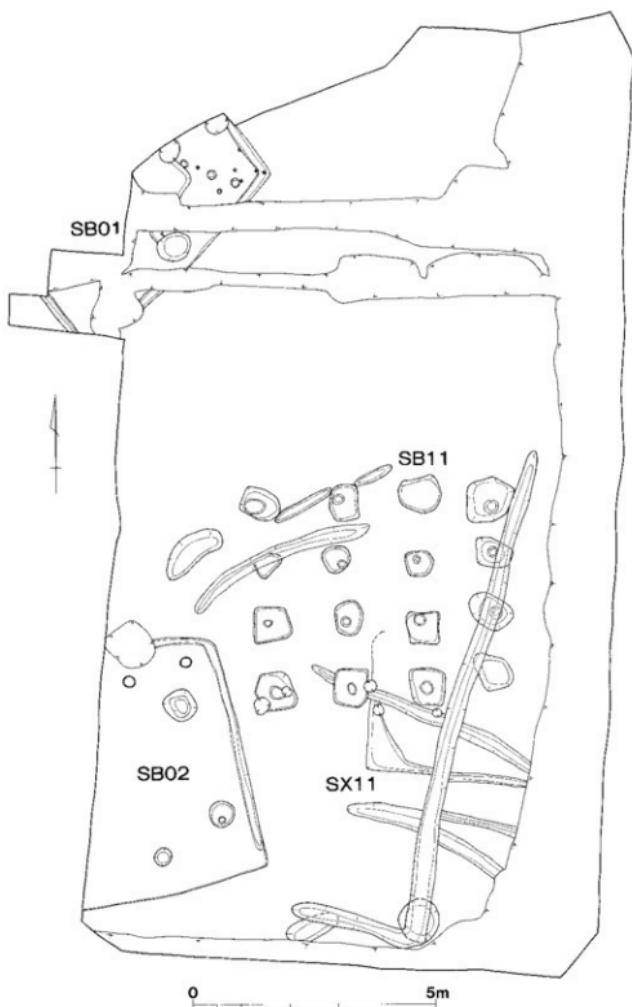


fig. 150 第2遺構面平面図



fig. 151 第2遺構面全景（北から）

S B 01 調査区の北東端で検出された隅円方形のプランと考えられる竪穴住居址で一辺5.5mである。一部拡張を行い約半分ほどを検出した。擾乱坑に寸断されているため、内部の状況はつかみにくいが、一部にベッド状遺構をもち、周壁溝を巡らすようである。また南東辺のはば中央に直径60cmほどの土坑がある。遺物などから、庄内期のものと考えられる。

S B 02 隅円方形のプランをもつ竪穴住居址である。一辺5mほどで西側約半分を検出した。北、東辺に周壁溝をもつ。

S X 01 一辺3mほどの四角いプランをもつ遺構であるが、東半分ほどは削平が著しく、肩部のたちあがりは認められなかった。竪穴住居状の遺構であるが、削平が著しく、詳細は不明である。埋土には、炭を多く含む。

S B 11 3間×3間の規模をもつ総柱の掘立柱建物址である。柱間は、東西1.7m、南北で1.5mほどで、やや東西に長い。柱掘形は、四角いものが多い。奈良時代以降のものかと考えられる。



fig. 152 S B 01全景（南東から）



fig. 153 S B 02全景（東から）



fig. 154 SB 11全景（北から）

下部砂礫層 第2遺構面の調査終了後、明灰色シルト質極細砂層、極細砂層のいわゆる「地山」をバックホーにより掘削し、大型植物化石が検出される土層より下層を人力により掘削した。砂礫層は調査区全域には広がらず、今回の調査区の北側3分の2の範囲にのみ広がっていた。そして、大型植物化石は砂礫層の広がる範囲にはほぼ収まっている。大型植物化石はT.P. 3mぐらいの砂礫層上面から砂礫層中にかけて検出され、最大のもので残存長9.93m、残存径70cmにおよぶ。調査区南端部の砂礫層の存在しない部分は、シルト層と植物遺体層の互層となり、その堆積は南側に下がっていく。

縄文土器片 この砂礫層中には縄文土器が含まれ、今回の調査区では112点の縄文土器片が見つかり、石器は石錘・台石・叩き石のほか、サスカイトの剥片5点が見つかった。縄文土器は中期から後期にかけてのもので、すぐ北側の第3次調査の際と同様な遺物の出土である。



fig. 155 大型植物化石出土状況（北から）

最終遺構面 砂礫層を除去した最終遺構面は洪水によってもたらされた砂礫がシルト質の底面を大きく抉る部分もあり、洪水の激しさを物語っている。最終遺構面には足跡等の生活痕跡は存在しなかった。

アカホヤ火山灰 調査区の北東隅では鬼界アカホヤ火山灰純降下層が検出でき、第3次調査の際に検出さ

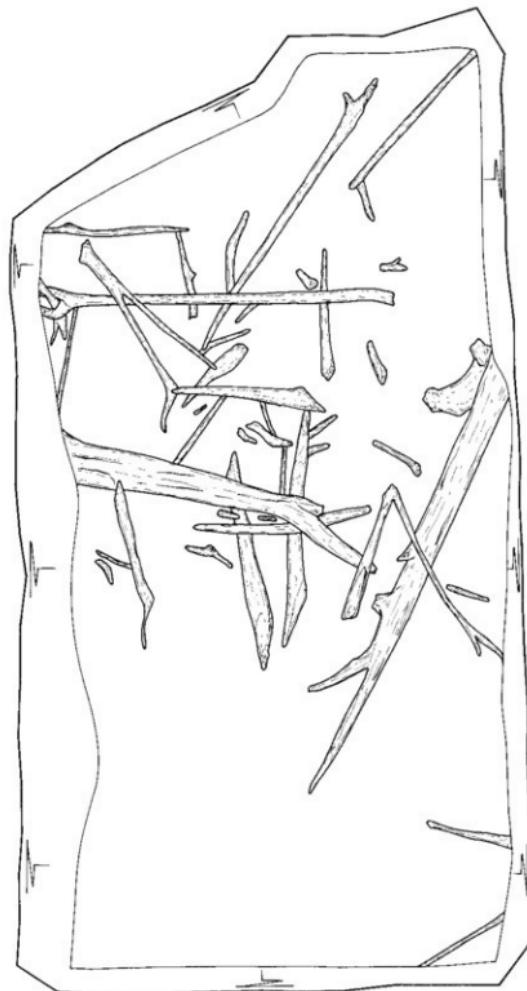


fig. 156 大型植物化石出土状況

0 5m



fig. 157 最終面全景（北から）



fig. 158 調査区西壁の土層断面

れたものの続きと思われる。火山灰層の上面はT. P. 2.15mである。

3.まとめ

従来の調査に引き続き、平安～鎌倉時代の集落を含む遺構面の広がりを確認できたほか、庄内期～奈良時代にかけての遺構面を検出したが、北西に位置する天ノ下地区においても、これらの時期の遺構が見つかっている。当調査区周辺を境に北西方向に遺構の広がりが、想定できそうである。

遺構については、SB02において多量の製塩土器と共に7世紀後半～末にかけての杯などが出土する点が注目される。

また、下層の砂礫層～最終遺構面にかけても以前の調査結果と同様に古環境を含めた縄文時代の復元のための貴重な資料を得ることができた。

14. 大田町遺跡

1. はじめに

当該地にマンション建設が計画されたため、平成2年度に試掘調査を実施した。その結果、遺物包含層および遺構が検出され、マンション建設の基礎築造部分を発掘調査することとなった。調査区は南北27m、東西約17mである。遺物包含層上面までを重機により掘削し、その後人力により掘削を行った。

これまでの調査は、平成2年度に関西文化財調査会が、今回調査地の西100mの地点（第1次調査）で行っている。今回の調査を第2次調査とする。また、当調査より遅れて着手した兵庫県教育委員会が、第1次調査の南の隣接地（第3次調査）で調査を行っている。

調査区を6区画に大分割し(北東区、北西区、中東区)、さらに基準点測量により5mメッシュに小分割した。小分割は東よりABC、北より123とし、西南のライン交点をグリッド名とした。遺構番号は、遺構面の数字を付け3桁の番号とした。ただし、ピット番号については、グリッド名を付して遺構番号とした。その他の遺構は先の3桁の通し番号とした。

2. 調査の概要

発掘調査の結果、奈良時代・平安時代・鎌倉時代の遺構面が3面検出された。遺構は、掘立柱建物址・土坑・溝・土器溜まりなどが検出された。遺物は、土師器・須恵器・綠釉陶器・灰釉陶器・鉄釘・刀子・鐵鍼・錢・磁石・滑石製品など多量かつ多種にわたるもののが出土した。

現地表から、約25cmで中世遺物包含層となり、地形としては北に高く、南に低くなっている。

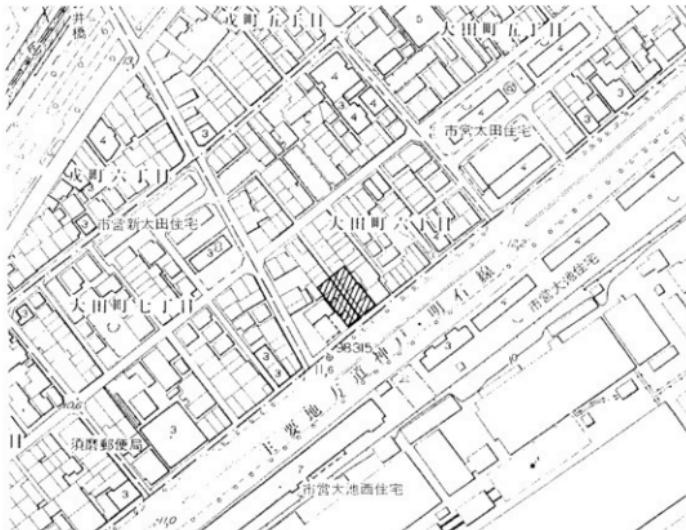


fig. 159
調査地点の位置
1:2500

第1遺構面

黄色泥砂層を掘削すると、暗灰色泥砂層の第1遺構面となる。包含層となる黄色泥砂層は砂質で、包含層中から検出される遺物は少し磨滅している。このことから洪水による堆積と考えられる。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、綠釉陶器、灰釉陶器、白磁、青磁、陶器である。

検出遺構は、ピット、溝状遺構である。遺構は、全体に浅く、遺構からの出土遺物は少量であった。S D101は、南北に走る深さ10cm、幅1m前後の溝で、溝内と溝周辺に径10cmの杭列を伴う。S D102（南北）、S D103（東西）も同様の規模の溝状遺構である。南東部では、S D115・116・117の溝状遺構が弧状に3条検出された。S D115は、北側に杭が打たれていた。このS D115の南端で、S D111と合流する。ここでは弥生時代の大型蛤刃石斧が出土した。S D111は、調査区の南辺に検出された。検出できたのは北側の肩部分のみで、規模は不明である。その他の溝状遺構は、さらに浅く小規模なもので、鋤溝ではないかと考えられる。

ピットは、散在した状態で建物等にまとまるものはなかった。

時期については、包含層出土遺物から12世紀頃と思われる。

第2遺構面

暗灰色泥砂層を掘削すると、暗灰褐色砂泥層の第2遺構面となる。暗灰色泥砂層からは、多量の遺物が出土した。土器では、土師器、須恵器、黒色土器、綠釉陶器、灰釉陶器がある。器種として皿、鉢、碗、壺、蓋、壺、甕、鍋、竈などである。金属器では、鉄釘、刀子、鐵鏃、不明鉄器、鍍金金具、鍍金銅製品、鉛棒、銅、餅鉄、鉛滓、炉床などがある。石器では砥石、サヌカイト片がある。その他馬と思われる歯、骨が出土した。

検出遺構は、掘立柱建物址8棟以上、土坑5基、溝状遺構25条、土器溜まり5基、落込み2基、流路1条、柱穴258基、地鎮遺構2基などである。

掘立柱建物について、表2のとおりである。

SK 203

S K 203は、土師器壺の口縁部を合わせてピット内に埋置したものである。ピットは直径25cm、深さ約8cmの浅いものである。壺内には遺物はなかった。

	梁行（柱間）	桁行（柱間）	備考
S B201	2間（1.6m）	3間（1.6m）	南西隅柱穴鉄製品 E 2 P213 骸骨 南北棟
S B202	2間（2.0m）	4間（2.0m）	北東隅柱穴鉄製品 E 4 P201 鐵鏃 南西隅柱穴柱根 南北棟
S B203	2間（2.0m）	3間（2.08m）	D 5 P202 柱根 C 5 P201 鐵鏃 他東側列骨・砥石 南北棟 東面廂
S B204	2間（2.0m）	3間（2.1m）	母星四隅鉄製品（釘・刀子） C 4 P203 柱根 C 3 P209 銭貨 南北棟 西面廂
S B205	2間（2.1m）	2間（2.6m）	南棟持柱 B 4 P206 刻印石 縦柱 南北棟
S B206	1間（2.4m）	2間（2.0m）	西側へ広がるか？
S B207	2間（2.4m）	？	東西棟？
S B208	3間（2.0m）	3間（2.2m）	北西隅柱穴砥石 西面廂

表2
第2遺構面検出
建物一覧表

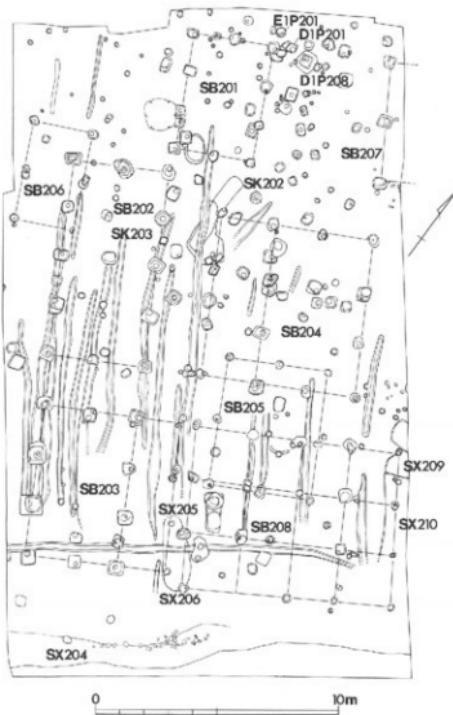


fig. 160 第2遺構面平面図



fig. 161 第2遺構面全景（北から）

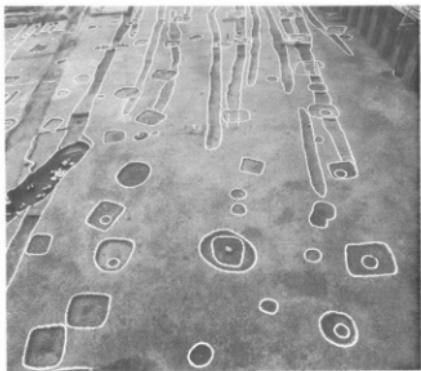


fig. 162 SB 202全景（北から）



fig. 163 SB 203全景（北から）

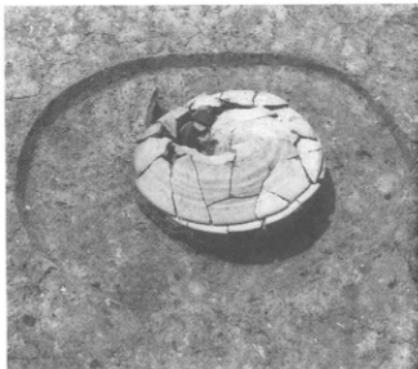


fig. 164 SK 203近景

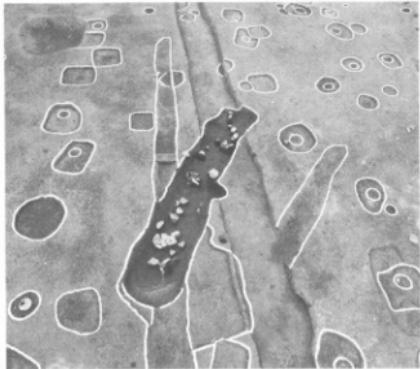


fig. 165 SK 202全景（南から）

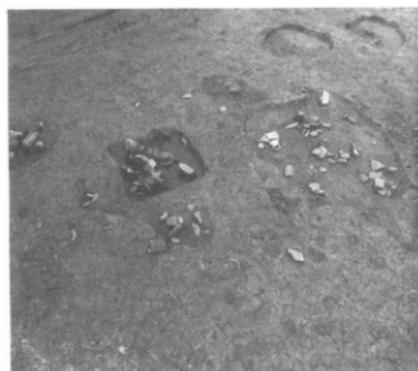


fig. 166 E 1 P 201, D 1 P 201, D 1 P 208（南から）

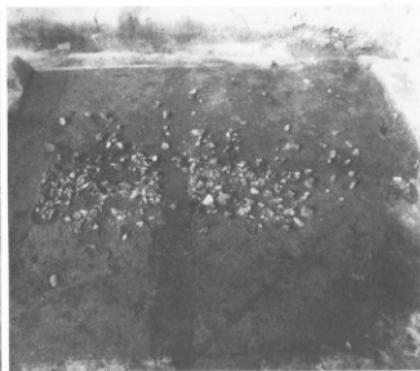
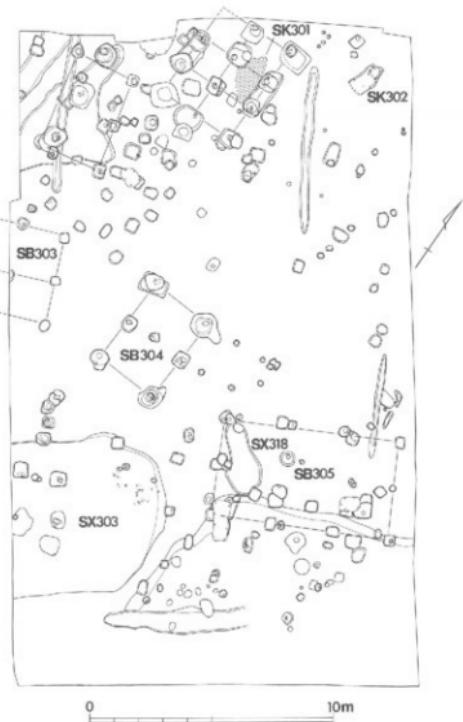


fig. 167 S X 205・S X 206全景（西から）

- B 4 P 214** B 4 P 214は土師器皿を3枚重ね、その上に石を置いたものである。土師器皿はS K 203のように完形品ではなく、口縁部が欠けたものや半分に欠損したもので構成されている。直径30cm、深さ約40cmのピットである。双方ともに地鎮的な祭祀を行った遺構と思われるが、検出された建物との関係は不明である。
- S K 202** S K 202は、長辺7.1m、短辺1.1m、深さ約40cmの南北に長い土坑である。長辺は底まではほぼ直角に掘り込んでいるが、短辺は階段状に掘り込まれている。土坑内より土師器壺・甕、須恵器壺・蓋、骨片等が出土した。遺構の性格は不明である。
- E 1 P 201** E 1 P 201は直径80cm、深さ約10cmのピットで、土師器、須恵器、砥石が出土した。D 1 P 201は、一辺80cm、深さ約10cmの方形ピットで、土師器、須恵器、縁釉陶器が出土した。D 1 P 208は、一辺1.2mの方形ピットで、一辺80cmと同じく方形にさらに一段落ちる。深さは約15cmである。土師器、須恵器、砥石が出土した。一段落ちたところに口縁部が一部欠けるが、ほぼ完形品の土師器皿が検出された。いずれも浅く、柱穴として捉えにくいものである。
- 溝状遺構は、25条検出され、S D 208以外はすべて南北方向に走る。いずれの遺構も幅約30cm、深さ約10cmの規模である。出土遺物は、土師器、須恵器の細片である。掘立柱建物に直接関係のあるような状態で検出されたものではなく、性格は不明である。
- S X 204** S X 204（S D 111の下層）は、東西に走る溝状遺構で、調査区内では北側の肩部分が検出されたものと考えられる。溝の最深部から徐々に浅くなる部分までが検出されている。鋭角に掘り込まれた人為的な溝状遺構と思われる。西部の肩付近で復元するとほぼ完形になる薬壺が細片で出土した。
- S X 205・206** 土器溜まり（S X 205・206）は、S B 203の東側に検出された。S D 208に切られる。平面形は不明である。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、縁釉陶器、灰釉陶器、鉄釘、刀子、不明鉄器である。土師器と黒色土器の碗、壺が大半を占める。出土量は28ℓ入りコンテナに約4箱分である。
- S X 210・211** S X 210・211は調査区東辺で検出された、10cmほどの落ち込み状遺構である。東に拡がると考えられるため、全体の形状は不明である。出土遺物はS X 205・206と同様で、土師器と黒色土器の碗、壺が大半を占める。遺物出土量は28ℓ入りコンテナに約2箱分である。
- 第3遺構面** 北西部と南東部の一部については、第3遺構面と捉えられる遺構面が存在する。基本的には、第4遺構面と時期差はほとんどないようである。
- 検出遺構は、掘立柱建物址5棟以上、土坑1基、溝状遺構5条以上、落ち込み状遺構1基、柱穴203基などである。他に、古墳時代の遺構として、土坑1基、落ち込み状遺構1基などがある。
- S B 301** S B 301の柱穴では、南北に細長い掘形を掘り、一度埋めた後に2基の柱穴を掘っている。東西に対応した位置関係で検出された。ほかに検出された建物の柱穴と比較して、特殊な構造をもつ建物であろうか。その他掘立柱建物址については、表3のとおりである。
- S K 302** S K 302から土師器、須恵器とともに、鹿角製の刀子の柄と考えられるものが出土した。遺物より奈良時代後半頃と考えられる。
- S K 301** S K 301は、東西南はS B 301の柱穴掘形によって切られるため、北辺の一部以外は平面

fig. 168 第3遺構面平面図

表3
第3遺構面検出
建物一覧表

	梁行（柱間）	桁行（柱間）	備考
S B301	2間(1.6m)	3間(1.45m)	根巻石 総柱 南北棟
S B302	1間(2.6m)	2間(2.00m)	東列2柱穴に礎石 南北棟
S B303	2間(1.9m)	1間(1.85m)	総柱？西側へ広がるか？
S B304	1間(2.6m)	2間(2.00m)	南西隅柱穴のみ礎石無 北東隅柱穴 刀子 南北棟
S B305	2間(2.0m)	3間(2.40m)	東西棟

形は不明である。南北2.3m、東西1.2mの規模の落ち込みが観察され、深さは約15cmである。滑石製品は、概ねこの落ち込みから出土している。しかしながら、臼玉は、東、西、南方向の柱穴掘形や遺構面直上からも出土しており、土坑を中心に半径約2mの範囲から検出された。また、出土した滑石製品には未製品がなく、土坑の縁辺で製作を行ったとは考えにくい。このことから土坑が製作址ではなく、上記の範囲で祭祀的な行為が行われた遺構と推定される。土器はこの落ち込みから出土しているが、臼玉と同様に周囲の遺構や包含層からも出土している。遺物より5世紀中頃と考えられる。



fig. 169 第3遺構面全景（北から）

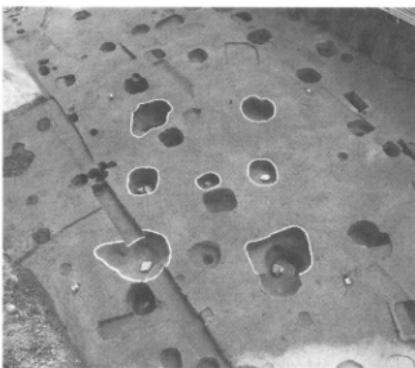


fig. 170 S B 304全景（北から）



fig. 171 S K 301全景（西から）



fig. 172 S K 302全景（南から）

S X 303 S X 303は、東西約6m以上、南北約6m、深さ30cmの皿状の落ちである。須恵器片と製塩土器が出土した。時期はS K 301と大差ない時期と考えられる。

第4遺構面 調査地区の北西部と南東部の一部で第3遺構面の下層となる遺構が検出された。北西部には2条の流路状遺構とピット、南東部にはピットがある。

北西部と南東部それぞれのピットからは少量の遺物が出土した。しかし、時期を詳細に判断するものはないが、第3遺構面と大差ないと考えられる。ピットは建物としてまとまるものはなかった。

3.まとめ 今回の調査では、別表および平面図に示したように13棟以上の建物が検出された。

遺構 第2遺構面では同一軸線上に並ぶ建物が8棟以上あり、すべてが同時存在とは考えられないが、一定の計画のもとに建てられた、9~10世紀のものと考えられる。

調査区南辺の溝（S X 204）は、旧山陽道とされる調査区南側の道路とほぼ平行して走り、山陽道とを画する溝であろう。約100m西方の地点においても、建物群南辺に東西方

向の溝状造構が検出されており、同様の性格のものと考えられる。

第3遺構面で検出された建物は、すべて同一軸線上に並ばないが、一定の計画性があり、また柱穴の規模や構造から特殊性のある建物と考えられ、その時期は8～9世紀としておきたい。これらの遺構は、小鍛冶の存在を想起させる点、瓦葺ではない建物、土器量が多く雑器がその大部分を占める点などから、いわゆる官衙遺構の主体となる建物群ではないと考えられる。つまり、今回の調査区は、主体となる官衙遺構の周囲に存在する雑居域としての位置付けがなされるものと考えられる。

遺物

出土遺物は多量かつ多種にわたる。多量の土器類の中で、特に綠釉陶器、灰釉陶器は当時の高級品であり、その使用者の階層を窺う上で重要である。また東海地方や滋賀・京都など多方面からの搬入品であり、搬入経路などを知ることができる。綠釉陶器の出土点数（206片）は、I遺跡からの出土数としては、少なくとも市内最多である。

また、多量の遺物の中で、瓦は2点程度にとどまる。このことから検出された建物は、瓦葺であった可能性は、極めて低いと考えられる。

金属製造物は約90点あり、鉄製品のほかに鉛滓があり、小鍛冶が行われたことが想定される。銭貨は4点出土しており、内訳は寛平大宝1点、延喜通宝2点、不明1点で、皇朝十二銭のまとまった出土例も市内では稀有のことである。鍍金金属製品についても用途等は現在不明であるが、貴重な発見である。

また、時期は異なるが、SK301からの滑石製品の出土量は、注目するに値する。特に547個の臼玉は、古墳時代の集落址からの臼玉出土点数としては、全国最多のものである。古墳時代の遺構・遺物や弥生時代の遺物の検出から、周辺に同時期の遺跡が存在することも予測される。



fig. 173 出土した土器（楠華堂撮影）

15. 神楽遺跡 第7次調査

1. 調査の経過

神楽小学校は大正12年に建設された校舎が老朽化したため、平成3年度から順次校舎の改築工事を実施することになった。神楽小学校周辺は周知の神楽遺跡として、これまでに6次におよぶ発掘調査が実施されている。そのため、神楽小学校内へも遺跡の拡がる可能性が考慮され、小学校の改築工事に先立って、平成2年度に試掘調査を実施した。その結果、改築工事予定地の東半部は、旧神楽池の掘削のためにすでに遺物包含層などは削平されており、遺跡の存在する可能性はないとの判断された。しかし、西半部には遺物包含層の拡がることが判明したため、今年度に財団法人神戸市スポーツ教育公社が発掘調査を実施することになった。発掘調査は、試掘調査の結果に基づき西側の新築校舎部分の1040m²を対象として実施した。



2. 調査の概要

調査地は、神楽池の堤となっていたらしく、池の掘削に伴うような削平は認められなかった。しかし、旧校舎部分と重なっていたため、旧校舎の基礎によって著しく擾乱を受けていた。この基礎は大正時代の基礎工事であるため、基礎部分以外ほとんど擾乱を受けておらず、遺跡は良好に遺存されていた。

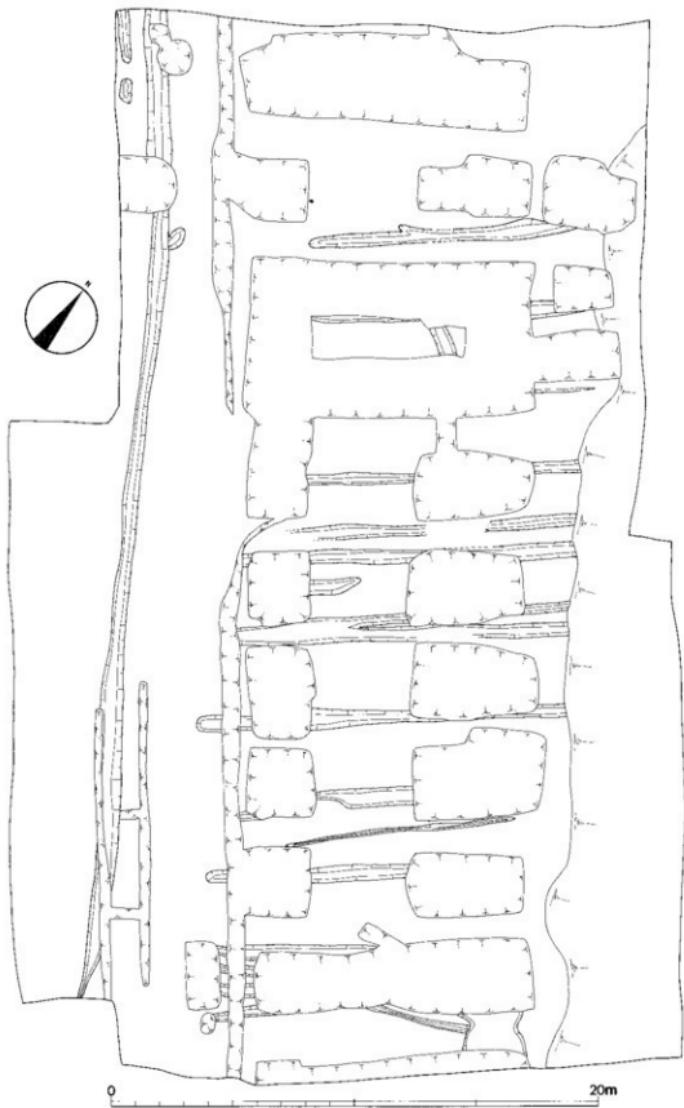


fig. 175 第1遺構面平面図

基本層序

基本層序は第1層は現代の盛土および搅乱、第2層は旧耕土層、第3層は旧床土層、第4層が暗灰色砂質土の遺物包含層である。この第4層の上面が第1遺構面で、中世（鎌倉時代）ころの遺構が検出されている。第5層は黄灰色シルト層で、この上面が第2遺構面になっており、古墳時代～平安時代前半の遺構が検出され、弥生時代後期の河道も検出されている。第6層は灰褐色～黄灰色シルト層で遺物は含まれていなかった。しかし、第7層の青灰色粗砂層は、弥生時代中期末の完形品を含む遺物包含層であることが判明した。全掘したが、遺物量は多くはなかった。また、この下層の第8層上面では、遺構は検出されなかった。以上のように、今回の調査では遺物包含層を2層と、遺構面を2面検出することができた。

第1遺構面

第1遺構面は、旧床土層を掘削した段階で検出された遺構面である。

検出された遺構は、溝を中心とする遺構で、中世以降の耕作などに関連する遺構ではないかと推定される。溝22条、土坑1基が検出された。

溝は現在の街割り（旧条里）と軸線を同じくすることからも、耕作などに関連する遺構ではないかと推定される。この溝の中には鎌倉時代ころの遺物が少量含まれており、このころの遺構の可能性が高いものと考えられる。また、南北方向に1条検出された溝は、東西方向の溝よりも、しっかりした溝であることから、この付近で坪境がかつて存在していた可能性もある。



fig. 176 第1遺構面全景（南から）

第2遺構面

黒色の遺物包含層を掘削した段階で検出された遺構面である。この遺物包含層には弥生時代から平安時代に至る多量の土器が含まれており、検出された遺構も、概ねこれらの遺物に対応する時代に掘削されたものと考えられる。

奈良時代～平安時代

奈良時代～平安時代の遺物は、これまでに実施されてきた6次の調査を含めて、最も遺物量が少なかった調査といえる。しかし、今回の調査では、調査地の北西隅で一辺1m近い方形の柱穴が3個検出されており、掘立柱建物址になるものと推定される。この柱穴内からは遺物が出土しておらず、遺物の面から時期の特定は困難であるが、第4次調査で検出された平安時代前半と推定される掘立柱建物址に、柱掘形などが類似しており、このころの建物址であった可能性が高いものと考えられる。

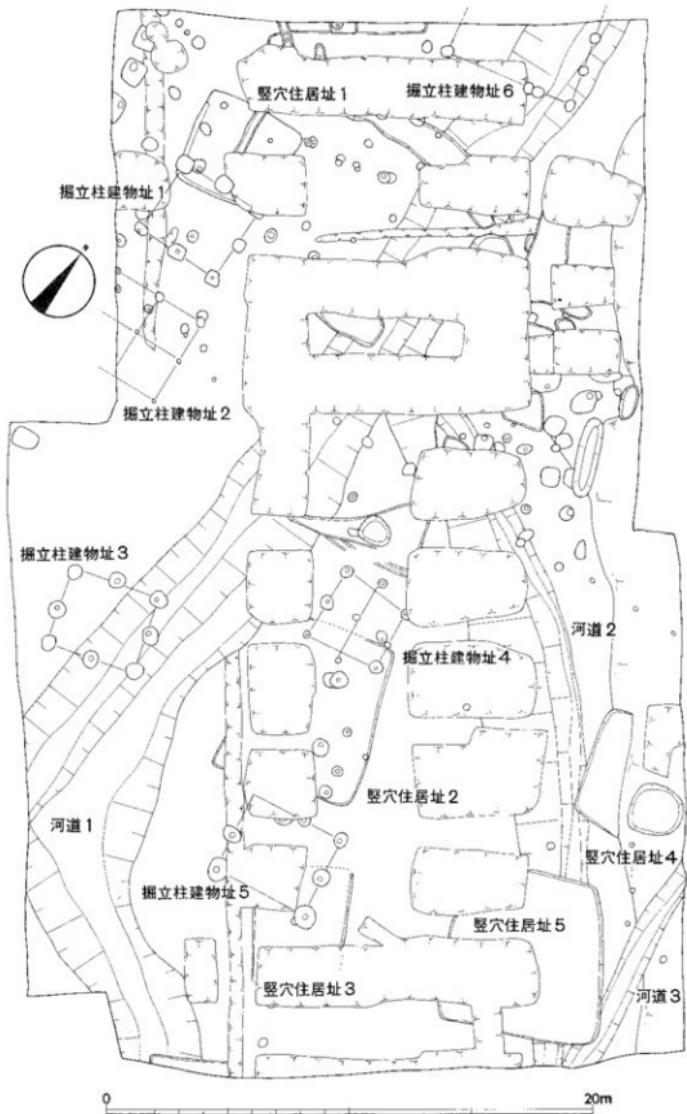


fig. 177 第2遺構面平面図

古墳時代

古墳時代の遺物は、遺物包含層中に多量に含まれることや、この周辺地の調査において最も多くの遺構、遺物が検出されていることから、古墳時代の集落の一部が発見されることが予想された。神楽小学校の基礎のため遺構面が大きく搅乱を受けているが、今回検出された遺構以外にも本来多数の古墳時代の遺構が存在していたことが、調査結果からも考えられる。また、遺構面全体の削平も著しく、本来存在していたであろう多くの遺構が消滅していることも考えられる。遺存していた遺構のみでも、竪穴住居址が5棟、掘立柱建物址が6棟検出されている。他に多数の土坑・ビットなどがある。

竪穴住居址

竪穴住居址は5棟検出されたが、遺存状況は良好なものではなかった。遺物の出土量も多くはなく、その時期を明確にできるものも少なかった。竪穴住居址間の切り合いはなく、掘立柱建物址に切られるものが1棟ある。

竪穴住居址1は一辺4m程度の小型の方形住居址である。柱穴は3箇所で検出され、本来4本柱であったものと考えられる。竪穴住居址の西から南にかけて周壁溝状の溝が認められた。また、西側の小ビットの上層埋土中には多量の製塙土器が含まれており、一括して投棄されていたようである。竪穴住居址2は長辺7m、短辺5.5mのやや南北に長い大型の長方形住居址である。柱穴が2箇所認められることから、本来はこれも4本柱であった可能性が高いものと考えられる。竪穴住居址3は一辺4m程度の小型の方形住居址である。柱穴は確認することができなかった。竪穴住居址4は一辺4.5m以上の方形住居址である。東半分を神楽池の掘削のために削平されている。柱穴、周壁溝も検出されず、全体として遺存状況の良くないものであった。

これらの住居址の時期は、竪穴住居址1・4以外は出土遺物が極めて少なく、その時期を特定することは困難である。しかし、遺物包含層などの遺物からは古墳時代後期のものが多いことから、概ねこの時期に該当するものと推定される。竪穴住居址1は出土した製塙土器や須恵器の坏身から、古墳時代後期前半の時期が考えられる。竪穴住居址4は出土した須恵器高杯の脚部から古墳時代後期後半の時期が考えられる。



fig. 178 第2選横面全景
(北から)

掘立柱建物址 掘立柱建物址はすべて南北方向に軸線をあわせている。しかし、掘立柱建物址 3については、若干方向を異にし平安時代の建物址の軸線と似ていることから、あるいは平安時代の建物址の可能性がある。

掘立柱建物址 1 は堅穴住居址 1 と切り合い関係が認められるもので、堅穴住居址 1 よりも新しい時期の 2 間 × 2 間の建物址である。掘立柱建物址 2 は西側が未調査地区に拡がるため、規模については不明確である。削平が著しく、南側にも延びる可能性もあるが、現状では 2 間 × 2 間の建物址と考えられる。掘立柱建物址 3 は、2 間 × 2 間のやや大きな円形の柱掘形を持つものである。前述したように、軸線がやや西に振れることから、若干の時期差が考えられる。掘立柱建物址 4 は柱間距離が一定しない、2 間 × 2 間の建物址である。総柱で棟持ち柱が突出するものである。掘立柱建物址 5 は小学校の基礎のために、柱が一部不明確であるが、2 間 × 2 間の建物址になる可能性の高いものである。掘立柱建物址 6 も小学校の基礎のために、柱が一部不明確で確実に建物址になるものか若干の不安を持たれるものである。推定復元を行い、東西 3 間南北 2 間以上のものになるものと考えられる。

これらの建物址の建物址の時期については、遺物を作う柱穴が少ないと明確にすることはできないが、堅穴住居址との切り合い関係が認められるものがあることなどから、堅穴住居址よりやや後出するものがあり、一部は堅穴住居址と共存していたものと考えられる。

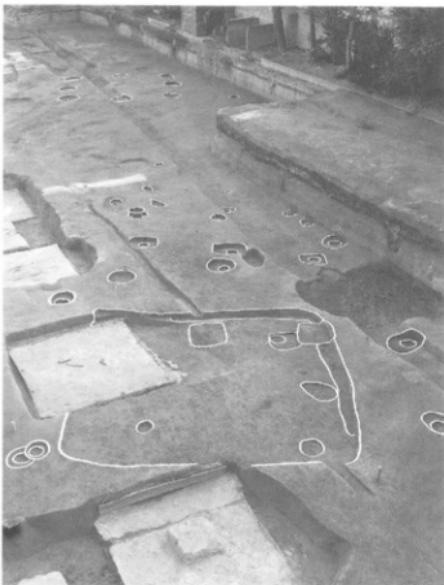


fig. 179 堅穴住居址 1 と掘立柱建物址
1 ~ 3 全景 (北から)

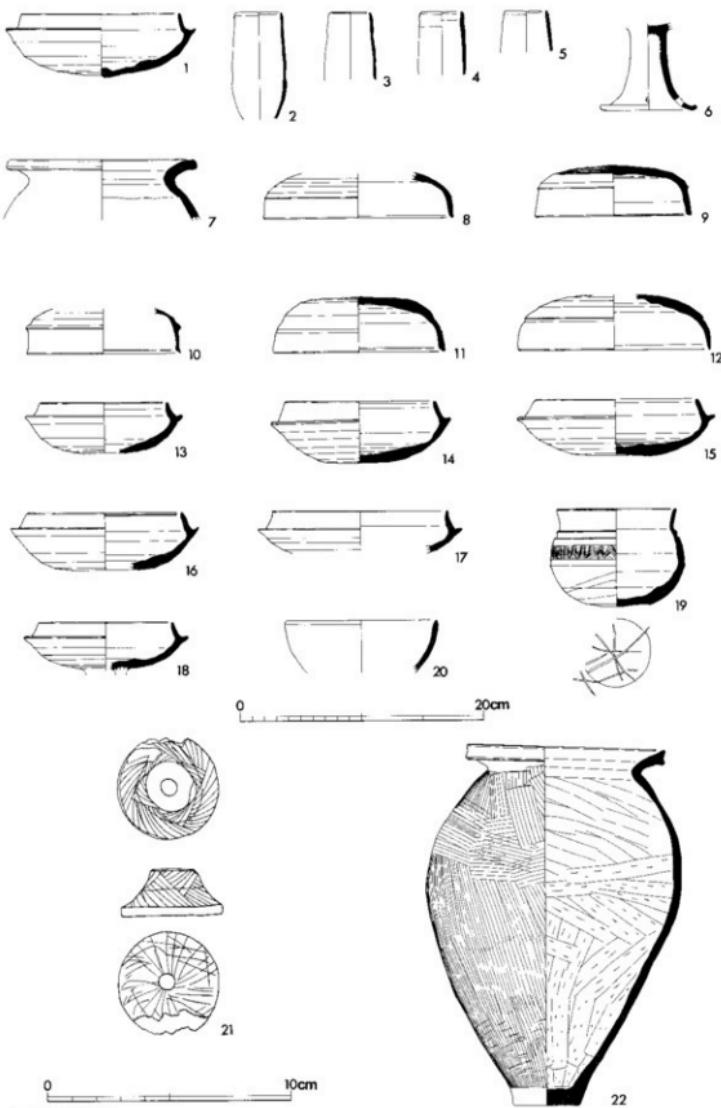


fig. 180 出土遺物実測図

1～5 壺穴住居址 1 6 壺穴住居址 4 7 壺穴住居址 5 8・9 ピット

10～20 遺物包含層

21 S K 102

22 青灰色粗砂層

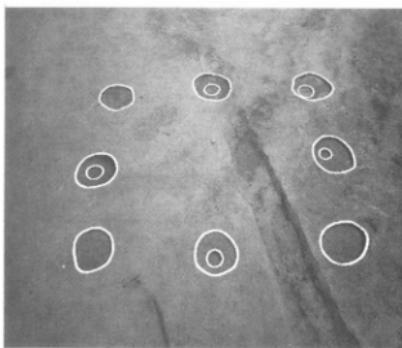


fig. 181 挖立柱建物址 3 (南から)

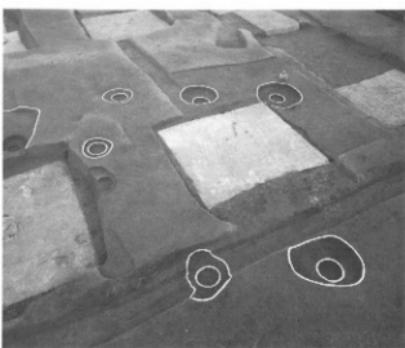


fig. 182 挖立柱建物址 5 (西から)

弥生時代 河道 弥生時代の遺構としては河道が3条検出された。河道1は、第2・3次調査で確認されたものに統くと考えられる河道である。最大幅5.0m、深さ1.3mで、北から南への流れが確認されるが、南端では当初東へ屈曲していたものが、その後直進するようになっている。これは河道2と同様で、当初河道1がこの付近で東へ屈曲していたものが、その後直進するようになったものと考えられる。最大幅6.0m、深さ1.0mである。河道3は、調査地の東端で一部が検出されたものである。最大幅1.3m、深さ30cmである。いずれの河道も埋土は砂を中心に堆積しており、粘土層は厚くなかった。遺物は比較的多量に含まれていたが、河道3からは遺物はまったく出土しなかった。河道1・2からは、弥生時代後期後半のものを主体とする遺物が出土しており、双方に大きな時期差ではなく、短期間のうちに流れたものであったと考えられる。



fig. 183 弥生時代の河道全景 (南から)

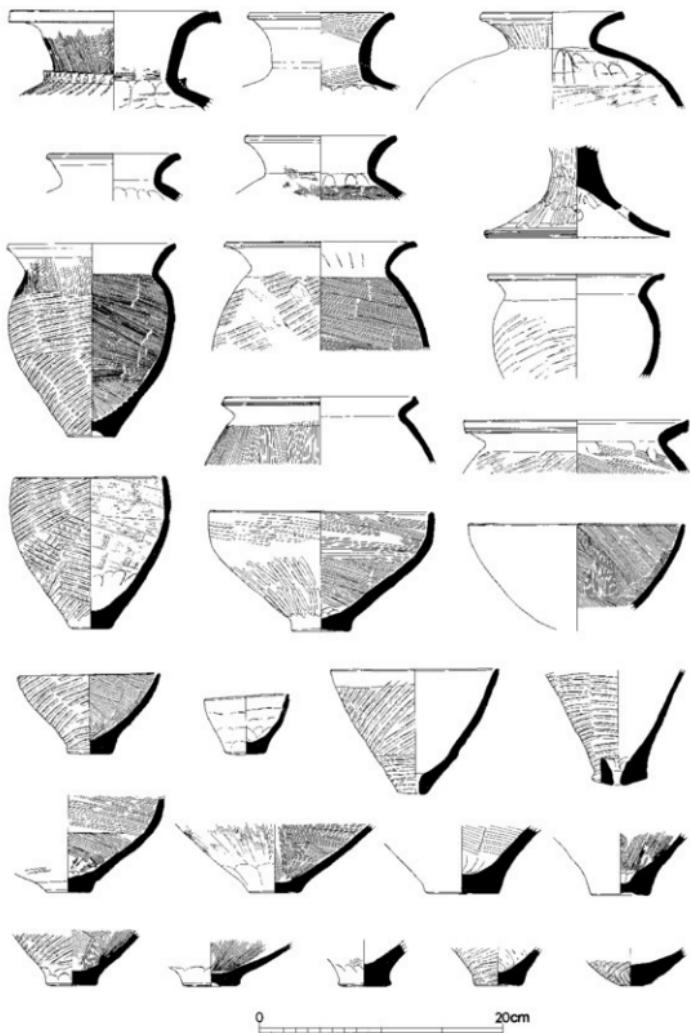


fig. 184 河道出土の弥生土器実測図

青灰色粗砂層 第2造構面がのる褐色～黄灰色シルト層下層に調査地全面を東から西へ覆うように堆積していた層である。一部西側では、この層が途切れているところもみられた。この層には、遺物量は極めて少ないが、弥生時代中期後半を主体とする遺物が含まれていた。完形品の甕が1点出土している。これはIV様式の甕である。この面の下層で、造構の検出作業を行ったが、造構については検出することはできなかった。



fig. 185 青灰色粗砂層内土器出土状況

3.まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の集落の一部を検出することができた。これまでの調査結果ともあわせて、この付近が古墳時代の集落の中心付近であることが明らかになった。今回は、古墳時代後期が集落の主体であったが、これまで古墳時代中期後半が主体であったことから、時期が異なると居住域も変えていたことがうかがわれる。このことは第3次調査で検出された掘立柱建物址と、今回の掘立柱建物址との軸線が異なっていることからも時期差などが考慮される。

これまで古墳時代の造構面と同一面で弥生時代後期の河道が検出され、その面以下には造構・遺物は検出されてなかった。しかし、今回造構は検出されなかつたものの遺物包含層が新たに確認され、今後この周辺で弥生時代中期の集落などが検出される可能性は極めて高いものと考えられる。

16. 長田神社境内遺跡 第5次調査

1. はじめに

長田神社境内遺跡は、長田区長田町1丁目から3丁目および大塚町1丁目から3丁目にかけて位置しており、標高85mの会下山から西へ派生する尾根の末端部および刈藻川によって形成された沖積地上に立地している。

当遺跡は、大正13年の長田神社再建工事の際に土器が発見されたことによって、周知されるようになった。以後、遺跡の性格については不明のままに、長田区の中心市街地として住宅・商店等が密集するようになってきた。

長田神社境内遺跡における本格的な調査は、昭和62年2月～10月に実施された長田地区市街地再開発事業に伴う発掘調査が、最初であった。この市道長田線西側の商業ビルと集合住宅建設に伴う調査では、縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の竪穴住居址3、掘立柱建物址3、壺棺墓1、溝4条、平安時代の木棺墓1、鎌倉時代～室町時代の井戸4、土坑3、柱穴群、江戸時代の井戸1などが検出されている。平成元年度に調査を実施した民間再開発事業では縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の竪穴住居址1、土坑、溝、鎌倉時代の掘立柱建物址2、木棺墓3、溝、土坑、井戸、縄文時代～弥生時代後期の河道が検出された。

今回の調査は、第1次調査北東の都市計画道路長田線拡幅部について調査を実施した。当該地は平成2年2月、平成3年3月に試掘調査を実施した結果、中世包含層と推定される土層が確認されたため、本格的な調査を実施することとなった。

調査は、地下埋設物を移動した後にシートパイルによる土留め工事を実施し、重機械による表土掘削を行って調査を開始した。



fig. 186
調査地点の位置
1:2500

2. 調査の概要

調査区は、調査地域の半ば北よりに東西に通る生活用道路より北側を北地区（D地区）、南側を南地区（南よりA～C地区）として設定して調査を実施した。

重機により表土・旧耕土・床土を除去した結果、調査地全域に中世遺物包含層を確認した。この中世遺物包含層の直下には、A地区では古墳時代後期の遺物包含層が確認された。B地区の北部からC・D地区では、中世の柱穴が掘り込まれた暗黄褐色粘質土の整地層の拡がりが確認された。一方、B地区の南部では、中世整地層が欠落し、古墳時代後期以降に埋没した水田遺構が検出された。古墳時代の水田遺構は、中世整地層の下層にも拡がり、C地区全城とD地区南部におよんでいる。この古墳時代の水田遺構の拡がる地区の下層は弥生時代終末期に埋没して陸化した河川が南北に流れていた。河川の北岸はD地区北端、南岸はB地区の中央で検出できた。河川の南側の地区は古墳時代後期～弥生時代後期の遺物包含層を良好に残存させていた。古墳時代後期包含層直下の弥生時代後期包含層上面では、溝1条と掘立柱建物址に伴う柱穴群と竪穴住居址群を検出した。さらに、弥生時代後期包含層の下面でも、竪穴住居址群を検出した。

(A) 北地区 現地表下1.8m（標高15.0m）で検出した遺構面である。調査区中央で、古墳時代後期の土坑1基（SK01）を検出した。SK01は、東西1.8m、南北1.0m、深さ30cmである。

第1遺構面 南北1.2m、深さ10～20cmの楕円形の土坑（SK02）がある。埋土内より、須恵器壺蓋・壺身・甕・土師器の他、拳大から人頭大の礫が出土している。

第2遺構面 現地表下2.1m（標高14.7m）で検出した遺構面である。調査区南側で、古墳時代中期の水田遺構を検出した。

現地表下2.4m（標高14.40m）で検出した遺構面である。調査区北側で、幅40～50cm、深さ10cmの溝状遺構（SD01）を、調査区南側で、幅25～55cm、深さ5～10cmの溝状遺構（SD02）を、調査区南東隅で、南北60cm×東西40cm以上、深さ10cmの楕円形の土坑（SK02）を検出した。また、調査区の中央より北側で幅4.0～4.5m、深さ10～30cmの河道2を、調査区南端で幅50～60cm、深さ20～30cmの河道3を検出した。

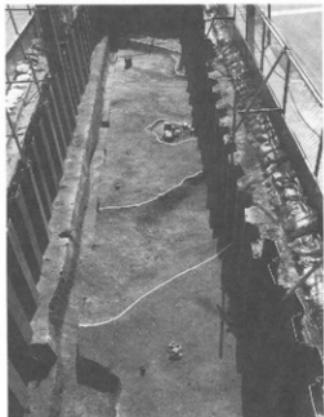


fig. 187 北地区第2遺構面全景 (北から)



fig. 188 SK02近景 (南から)

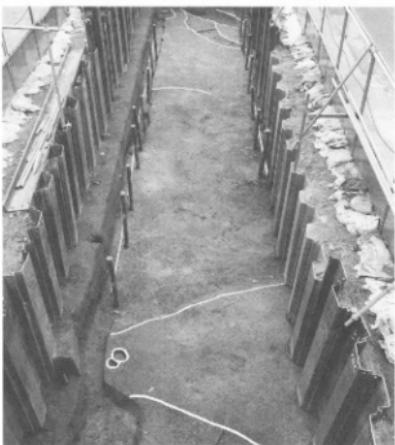


fig. 189 北地区第3遺構面全景（北から）

(B) 南地区 南地区北端部の暗黄褐色粘質土を遺構面において、柱穴を16箇所検出した。柱穴は直径
第1遺構面 15~30cmで、灰色粘質土を埋土としている。建物としてのまとまりはないが、一部の柱穴
 埋土内に小皿完形品が出土した。また、柱穴内に礎石状の河原石を据えているものも1箇所検出された。

第2遺構面 南地区北部では、中世整地層の直下、調査地中央部では中世遺物包含層の下層で水田遺
 構を検出した。水田は、幅40~100cm前後の畦畔によって画された不整形な区画形態をして
 いた。水田は、南東から北西に緩やかに傾斜する自然地形に沿って形成され、また南側



fig. 190 南地区第1遺構面全景（北から）



fig. 191 南地区第2遺構面全景（北から）

には水田区画に沿う溝を検出した。溝（S D01）は幅60cm、深さ20cm前後のU字溝で、周囲に杭状のビットが数箇所検出されており、水田に伴う導水路と考えられる。

- 第3遺構面
(上層) 南地区南部では、水田遺構は削平されて検出されず、古墳時代後期の遺物包含層を除去すると、暗灰色砂質土を埋土とする柱穴群を検出した。建物としてのまとまりは、調査区南端で、南北3間（5.1m）×東西2間（2.0m）以上の掘立柱建物址で、南側に幅1.1mの庇を設けている。

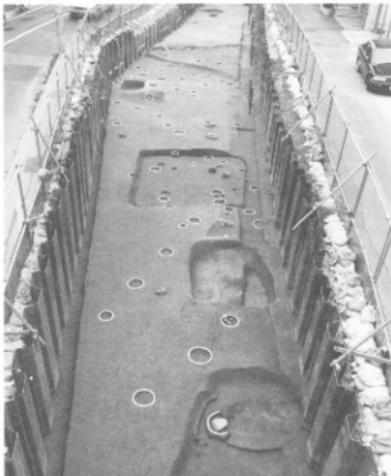


fig. 192 南地区第3遺構面（上層）全景（南から）

- 第3遺構面
(下層) 古墳時代後期の竪穴住居址を1棟（S B02）と古墳時代前期の竪穴住居址8棟（S B01・03～05・08・11・13・18）を検出した。
- S B01 S B01は南北4.0m×東西2.9m以上、深さ30～40cmの方形の竪穴住居址である。周壁溝は西側および南側で確認されたが、北側は搅乱により削平されている。東側は、調査区外に拡がっている。主柱穴は3箇所で確認した。
- S B02 S B02は南北3.7m×東西3.7m、深さ30～40cmの方形の竪穴住居址である。周壁溝は四周している。周壁溝内には、直径10～15cmの杭状のビットが検出されている。主柱穴は4箇所で確認した。
- S B03 S B03は南北5.4m×東西2.0m以上、深さ15～20cmの方形の竪穴住居址である。周壁溝は西側と北側で確認されたが、南側は搅乱により削平されており、東側は調査区外に拡がっている。主柱穴は1箇所で確認した。
- S B04 S B04は南北5.0m×東西3.0m、深さ15～20cmの長方形の竪穴住居址で、周壁溝は四周している。周壁溝内には、直径10～15cmの杭状のビットが検出されている。主柱穴は4箇所で確認した。北側の主柱穴のほぼ中央付近で直径70cm、深さ10cmの炉跡を検出した。また、南壁の中央付近で、南北70cm×東西60cm、深さ20cmのビットを検出した。
- S B05 S B05は南北3.9m×東西3.4m、深さ20～25cmの方形の竪穴住居址で、周壁溝は四周し

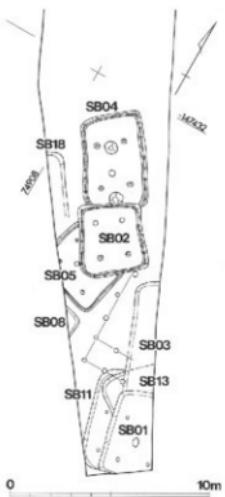


fig. 193 南地区第3遺構面平面図



fig. 194 SB 04・05・08全景（北から）

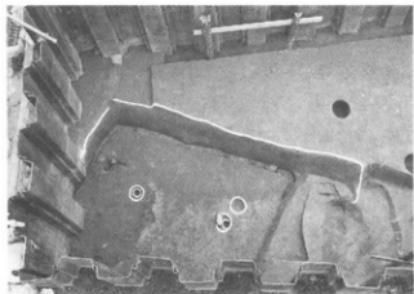


fig. 195 SB 01全景（東から）

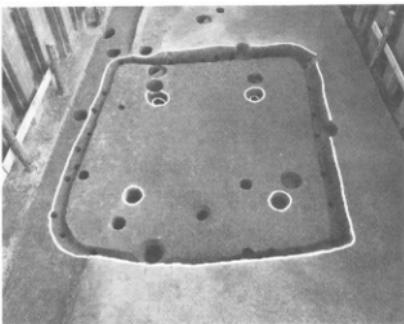


fig. 196 SB 02全景（北から）

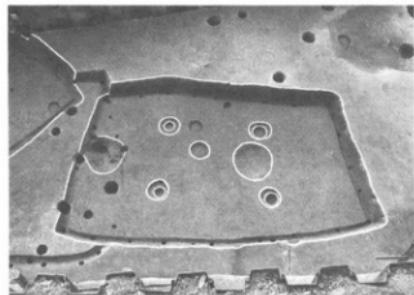


fig. 197 SB 04全景（東から）



fig. 198 SB 08全景（東から）



fig. 199 SB 11全景（東から）

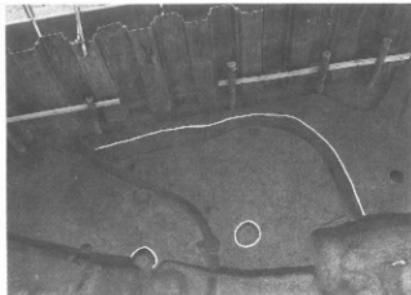


fig. 200 SB 14全景（北から）

ている。柱穴は6箇所で確認した。

SB 08 SB 08は南北1.4m以上×東西1.5m以上、深さ25cmの方形の竪穴住居址で、住居址の北東隅のみ検出しており、西側と南側は、調査区外に拡がっている。周壁溝が巡っており、柱穴は調査区内では確認されなかった。

SB 11 SB 11は南北5.4m×東西4.2m以上、深さ20cmの方形の竪穴住居址で周壁溝が巡っており、周壁溝内には、直径10~15cmの杭状のピットが検出されている。主柱穴は2箇所で確認した。

SB 13 SB 13は南北2.0m以上×東西2.8m以上、深さ10cmの方形の竪穴住居址で、南側はSB 01によって切られている。柱穴は調査区内では、確認されなかった。

SB 18 SB 18は南北1.0m以上×東西5.7m以上、深さ5~10cmの方形の竪穴住居址で、南側は調査区外に拡がっている。周壁溝が巡っており、柱穴は調査区内では、確認されなかった。

第4遺構面 古墳時代前期初頭の竪穴住居址を3棟（SB 06・07・14）と弥生時代後期末の竪穴住居址5棟（SB 09・10・12・16・19）を検出した。

SB 06 SB 06は南北5.0m×東西5.2m、深さ10~15cmの方形の竪穴住居址である。周壁溝は四周している。柱穴は6箇所で確認した。西側の主柱穴のはば中央付近で、直径70cm、深さ15cmの炉跡を検出した。

SB 07 SB 07は南北3.0m×東西1.7m、深さ20~40cmの方形の竪穴住居址で、住居址の西隅のみ検出しており、東側は、調査区外に拡がっている。周壁溝が巡っており、柱穴は調査区内では、確認されなかった。南壁際において、落ち込んだ状態で、土器器鉢がほぼ一個体分出土している。

SB 09 SB 09は南北9.2m以上×東西3.6m以上、深さ40~45cmの円形の竪穴住居址で、住居址のはば西側半分のみ検出している。周壁溝が巡っており、壁に沿って幅60~80cmのベッド状遺構が検出した。ベッド状遺構の床面からの比高差は20cmである。柱穴は5箇所で確認された。ベッド状遺構の内側には、幅20~50cm、深さ10~15cmの周溝が巡っている。周溝の西側付近で、砥石が出土している他、床面直上において、弥生時代後期の壺・甕・鉢などが出土している。

SB 10 SB 10は南北8.2m×東西4.7m以上、深さ15~20cmの隅円方形の竪穴住居址である。北側は自然河道に切られており、東側はSB 09に切られている。周壁溝が巡っており、柱穴

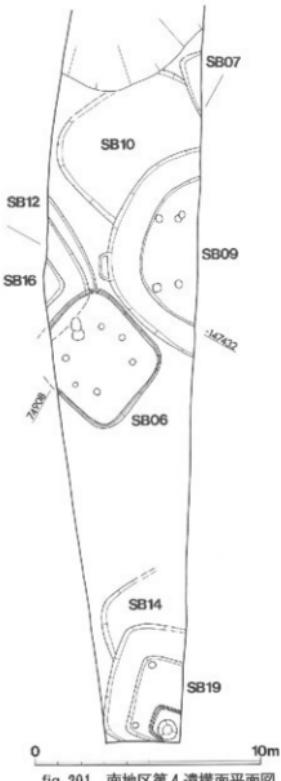


fig. 201 南地区第4遺構面平面図



fig. 202 南地区第4遺構面全景（北から）



fig. 204 SB 09全景（南から）



fig. 203 SB 06全景（東から）

は8箇所で確認された。

S B 12

S B 12は南北2.9m×東西7.0m以上、深さ5～10cmの隅円方形の竪穴住居址である。南側は調査区外に拡がっている。周壁溝が巡っており、柱穴は調査区内では、確認されなかった。

S B 14

S B 14は南北4.0m以上×東西4.0m以上、深さ10～15cmの隅円方形の竪穴住居址である。南側はS B 11に切られており、東側は、調査区外に拡がっている。周壁溝が巡っており、柱穴は2箇所で確認された。

S B 16

S B 16は南北3.0m以上×東西4.0m以上、深さ25～30cmの隅円方形の竪穴住居址で、南側は調査区外に拡がっている。周壁溝が巡っており、壁に沿って幅70～90cmのベッド状遺構が検出した。ベッド状遺構の床面からの高さは20cmである。柱穴は2箇所で確認された。ベッド状遺構の内側には、幅10～20cm、深さ10cmの周溝が巡っている。

S B 19

S B 19は南北6.0m以上×東西4.5m以上、深さ25～30cmの隅円方形の竪穴住居址で、南側と東側は調査区外に拡がっている。周壁溝が巡っており、壁に沿って幅1.0～1.5mのベッド状遺構を検出した。ベッド状遺構の床面からの高さは15～20cmである。柱穴は2箇所で確認された。ベッド状遺構の内側には、幅25～35cm、深さ10cmの周溝が巡っている。調査区南端において、南北1.0m×東西1.3m、深さ15cmの炉跡が検出した。炉跡の周囲には、幅15～30cm、高さ3～5cmの土手状の高まりが検出された。この炉跡の周堤は、地山の土を貼りついている。

3.まとめ

今回の都市計画道路長田線街路築造工事に伴う発掘調査は、長田地区市街地再開発事業に係る発掘調査区N地区の北隣にあたり、長田神社境内遺跡発見の端緒となった長田神社境内地の東隣で行った。

再開発事業地内発掘調査のN地区では、弥生時代後期～古墳時代までの竪穴住居址が同一遺構面で検出されたが、今回の調査区においては、弥生時代後期～古墳時代後期にわたる竪穴住居址群を重層した状況で検出された。検出された竪穴住居址は弥生時代後期と考えられる円形竪穴住居址1棟、隅円方形竪穴住居址4棟、古墳時代初頭と考えられる方形竪穴住居址5棟、古墳時代前期の方形竪穴住居址5棟、古墳時代後期と考えられる方形竪穴住居址1棟であった。またさらに、古墳時代中期以降と推定される掘立柱建物址1棟を含む柱穴群も検出され、長田神社境内遺跡では、集落域を限定しつつも、弥生時代後期～古墳時代の全期間にわたって集落が形成されていたことが明らかになった。

一方、今回の調査地の北東側には莉藻川の中位段丘がせまり、この段丘縁辺を弥生時代には自然河道が北から南西方向に流れていた。この自然河道は弥生時代後期後半には埋没して湿原となり、古墳時代後期以後水田が形成されたと推定される。そして、完全に陸化した中世には、掘立柱建物による集落形成があったものと考えられる。

また、自然河道の北岸上層では、古墳時代後期の須恵器・土師器が集中して出土し、自然河道の北側の段丘上には古墳時代後期の集落および古墳の存在も予想される。

17. 五番町遺跡

1. はじめに

当調査区は、五番町遺跡、二番町遺跡に隣接する場所に位置する。平成3年8月1日付で神戸市住宅局改良事業室より市営住宅建設に伴う試掘依頼が提出された。このため試掘調査を実施したところ、工事予定地の一部に埋蔵文化財の存在が確認された。この結果に基づき最終的な建築物の位置が決定されたが、計画上、埋蔵文化財に影響を与えると考えられる部分約200m²について平成3年12月3日より本調査を開始した。

また、調査途中、包含層・遺構面がさらに南へ拡がる可能性が生じたため試掘坑などを設け調査した結果、その存在が確認されたため、この部分約250m²についても調査を行った。

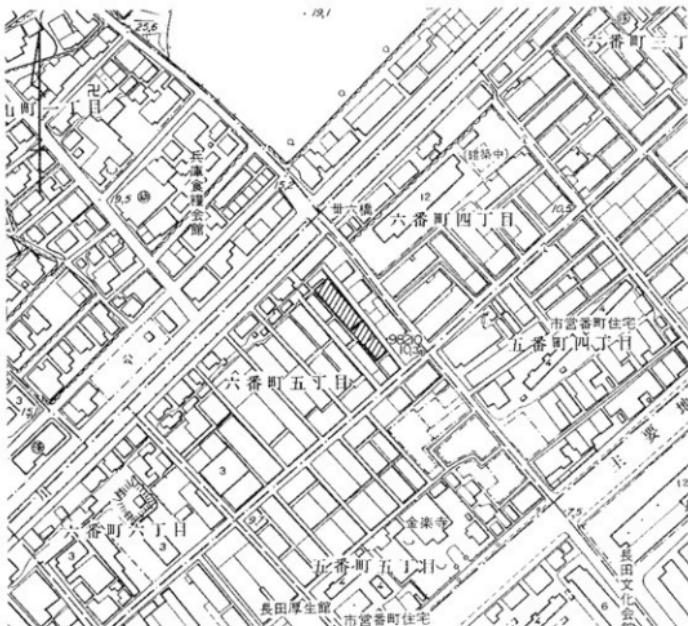


fig.205
調査地点の位置
1:2500

2. 調査の概要

便宜上、当初調査に入った部分を第1調査区とし埋め戻し後、新たに追加して調査した部分を、第2調査区とする。

第1調査区

今回の調査地は、遺構面が2面以上存在する。基本層序は、表土、旧耕土の下に中世の土器をふくむ淡灰黄色砂質土、第1遺構面のベースとなる褐灰色土、部分的に堆積する暗灰色土をへて第2遺構面のベースとなる淡灰黄色土となる。なお、調査区の南側約4分の1は近世の田圃の造作が淡灰黄色土にまでおよんでいるため、第1遺構面は完全に削平されて、さらに1層下の明黄灰色粘土層が露呈している。

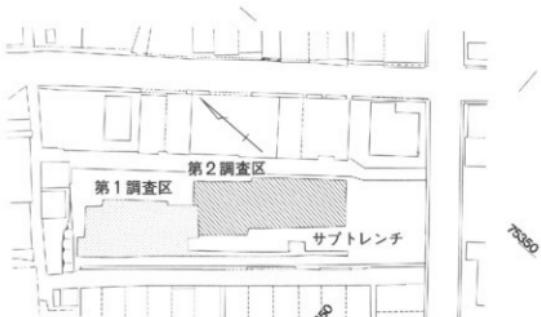


fig. 206 調査区位置図 1:800

第1遺構面 挖立柱建物址3棟（SB01～03）、土坑1基、溝5条およびピット多數を検出した。12～13世紀に属すると考えられる。

SB01 衍行6間、梁行4間の総柱建物で南北棟である。



fig. 207 第1調査区第1遺構面全景
(垂直写真)



fig. 208 同上（北から）

- S B02**
桁行4間、梁行2間以上の総柱建物で南北棟である。S B01とはやや方向を違える。
- S B03**
2間×3間以上であるが調査地外へ延びるため、規模等は不明である。
- S D01**
S B01と方向を同じくする溝で、比較的遺物を多く含む。第2調査区へ延びている。

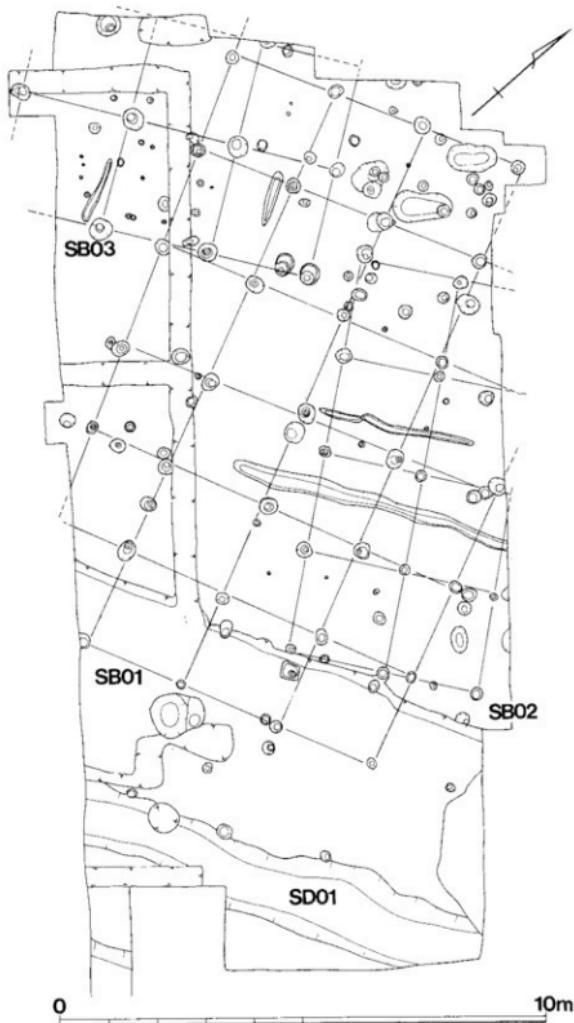


fig. 209 第1調査区第1遺構面平面図

第2遺構面 挖立柱建物址2棟(SB11~12)、樋列、溝1条、不整形の落ち込み1箇所および鋤溝多数などを検出した。

SB11 一辺30cmほどの四角形の柱掘方で1間×2間の建物である。

SB12 桁行4間以上×梁行2間の東西棟である。柱掘方は長方形で1.0~1.2m×60~80cmで、深さ60cm前後である。

樋列 SB12と同方向で一辺60cm程度のやや崩れた方形の樋形で、5間分が確認された。

SD11 調査区の北端を東西に走る幅40cm、深さ15cmほどの溝である。SB12に先行する。

耕作痕 埋土、切り合いの状態からSB12より古いものと新しいものに分けられる。

試掘坑 遺構、包含層がさらに南に延びる可能性が生じてきたため、用地内の東西両側にサブトレンチを設定し調査を行った。この結果、遺構面となる土層がさらに南に延びることが確認された。さらに、東側にある建築予定部分に試掘坑を設定し調査を行ったところ、同様の層の可能性のある堆積とともに中世の土器を含む包含層が確認された。

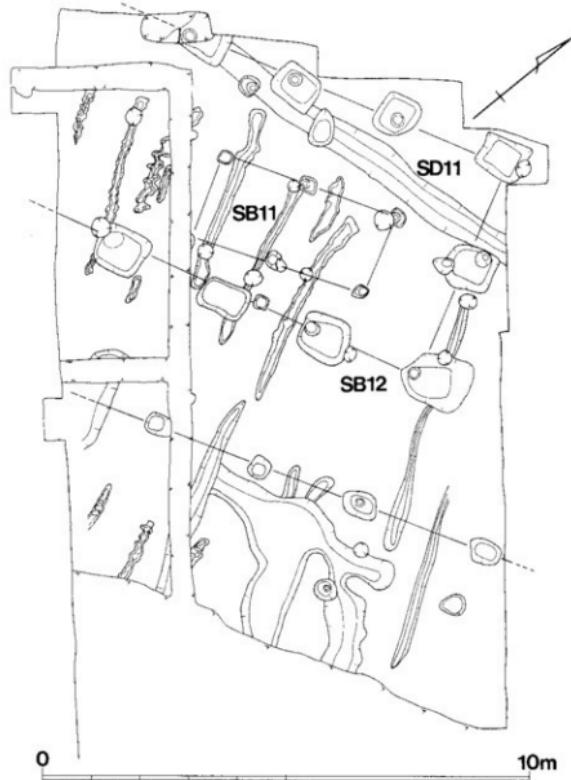


fig.210 第1調査区第2
遺構面平面図



fig. 211 第1調査区第2遺構面全景
(垂直写真)



fig. 212 同上（南から）



fig. 213 SB 12完掘状況（東から）